

室町殿跡・上京遺跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

室町殿跡・上京遺跡

2021年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をととして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物新築工事に伴う室町殿跡・上京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和3年10月

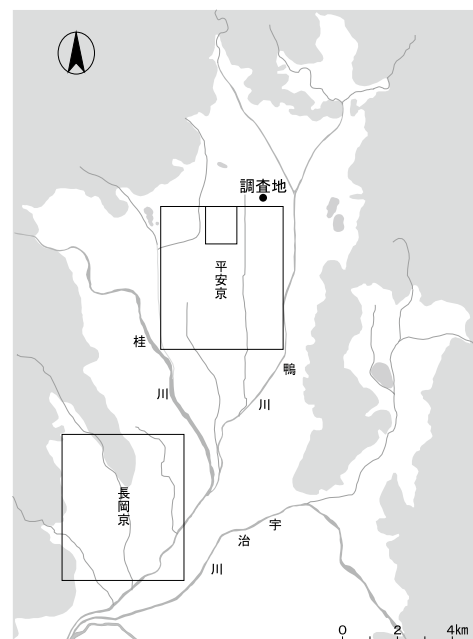
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 室町殿跡・上京遺跡（京都市番号 20 S 337） |
| 2 調査所在地 | 京都市上京区岡松町 255 番 |
| 3 委 託 者 | 関電不動産開発株式会社
取締役 常務執行役員 住宅事業本部長 宮永 亮 |
| 4 調査期間 | 2021 年 1 月 12 日～2021 年 3 月 15 日 |
| 5 調査面積 | 204 m ² |
| 6 調査担当者 | 西田倫子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「船岡山」・「相国寺」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 西田倫子
付章：龍谷大学文学部歴史学科 北野信彦・山田卓司、
当研究所 関 晃史 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員がたった。 |
| 15 協力者 | 五十川伸矢（京都橘大学）、鋤柄俊夫（同志社大学）、水ノ江和同（同志社大学）、山田 徹（同志社大学）（五十音順・敬称略） |

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 第3面の遺構	7
(3) 第2面の遺構	8
(4) 第1面の遺構	10
4. 遺 物	13
(1) 土器・陶磁器類	13
(2) 瓦類	16
(3) 土製品	17
(4) 石製品	18
(5) 銭貨・金属製品	19
(6) 鑄造・鍛冶関連遺物	20
5. ま と め	21
(1) 室町時代の遺構	21
(2) 安土桃山時代から江戸時代の遺構	21
付章 出土資料の自然科学分析	23

図 版 目 次

図版1	遺構	第3面遺構平面図 (1:150)
図版2	遺構	第2面遺構平面図 (1:150)
図版3	遺構	第1面遺構平面図 (1:150)
図版4	遺構	調査区北壁断面図 (1:100)
図版5	遺構	調査区東壁断面図 (1:100)
図版6	遺構	土器溜184・147、柱穴149実測図 (1:20)、石室256、土坑143実測図 (1:50)
図版7	遺構	建物1実測図 (1:60)

- 図版 8 遺構 石室128・集石71実測図（1：50）
- 図版 9 遺構 石垣50実測図（平面図・立面図1：80、断面図1：40）
- 図版10 遺物 土器実測図1（1：4）
- 図版11 遺物 土器実測図2（1：4）
- 図版12 遺物 土器実測図3（1：4）
- 図版13 遺物 軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦拓影及び実測図（1：4）
- 図版14 遺構 1 第3面全景（北から）
2 溝271検出状況（東から）
3 溝271土器出土状況（東から）
- 図版15 遺構 1 溝271完掘状況（東から）
2 溝271断面（東から）
3 第2面全景（北から）
- 図版16 遺構 1 三和土203検出状況（西から）
2 土器溜184土器出土状況（北東から）
3 柱穴149土器出土状況（北東から）
- 図版17 遺構 1 第1面全景（北から）
2 建物1検出状況（北から）
- 図版18 遺構 1 建物1粘土貼付状況（南から）
2 布掘地業55検出状況（西から）
3 カマド33土器出土状況（北西から）
4 土器溜147土器出土状況（北東から）
- 図版19 遺構 1 石室128検出状況（南東から）
2 集石71検出状況（北西から）
- 図版20 遺構 石垣50全景（北西から）
- 図版21 遺構 1 石垣50石積み状況（北西から）
2 石垣50矢穴痕跡（南西から）
3 石垣50断割断面（北西から）
- 図版22 遺物 溝271、土器溜184、柱穴149、土坑270出土土器
- 図版23 遺物 石室128、土取土坑186、カマド33、土坑37・143出土土器
- 図版24 遺物 土器溜147出土土器、土製品、瓦、金属製品、鑄造・鍛冶関連遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：800）	2
図 3	調査前全景（北東から）	2
図 4	作業状況（北西から）	2
図 5	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図 6	溝 269・271 実測図（1：50）	8
図 7	柱穴列 2 実測図（1：40）	9
図 8	柱穴列 1 実測図（1：40）	12
図 9	丸瓦拓影及び実測図（1：4）	16
図 10	土製品実測図（1：4）	17
図 11	石製品実測図（1：4、石 11・12 のみ 1：6）	18
図 12	銭貨拓影（1：2）	19
図 13	金属製品実測図（1：2）	19
図 14	鋳造・鍛冶関係遺物実測図（1：4、鋳 1 のみ 1：2）	20

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	13

付 表 目 次

付表 1	土器類一覧表	32
------	--------------	----

室町殿跡・上京遺跡

1. 調査経過

本調査は、京都市上京区岡松町計画に伴って実施したものである。調査地は、京都市上京区岡松町255番に位置しており、室町殿跡及び上京遺跡にあたる。工事に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が、試掘調査を行い、遺構が良好に遺存していることが確認されたことから、原因者である関電不動産開発株式会社に対して発掘調査の指導が行われた。調査は、関電不動産開発株式会社から公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施することとなった。

調査区は、文化財保護課の指導により、東西10m、南北20mの範囲で設定した（図2）。また、調査区西側で確認した石垣50の範囲や機能を確認するため、調査区外北側（拡張区1）と調査区中央西側（拡張区2）とに拡張区を設けた。調査面積は204㎡である。

発掘調査は、2021年1月12日から3月15日まで実施した。それぞれの遺構面において記録作業を行い、各遺構面の調査終了時には文化財保護課の検査指導を受け、検証委員である京都大学の伊



図1 調査位置図（1：2,500）

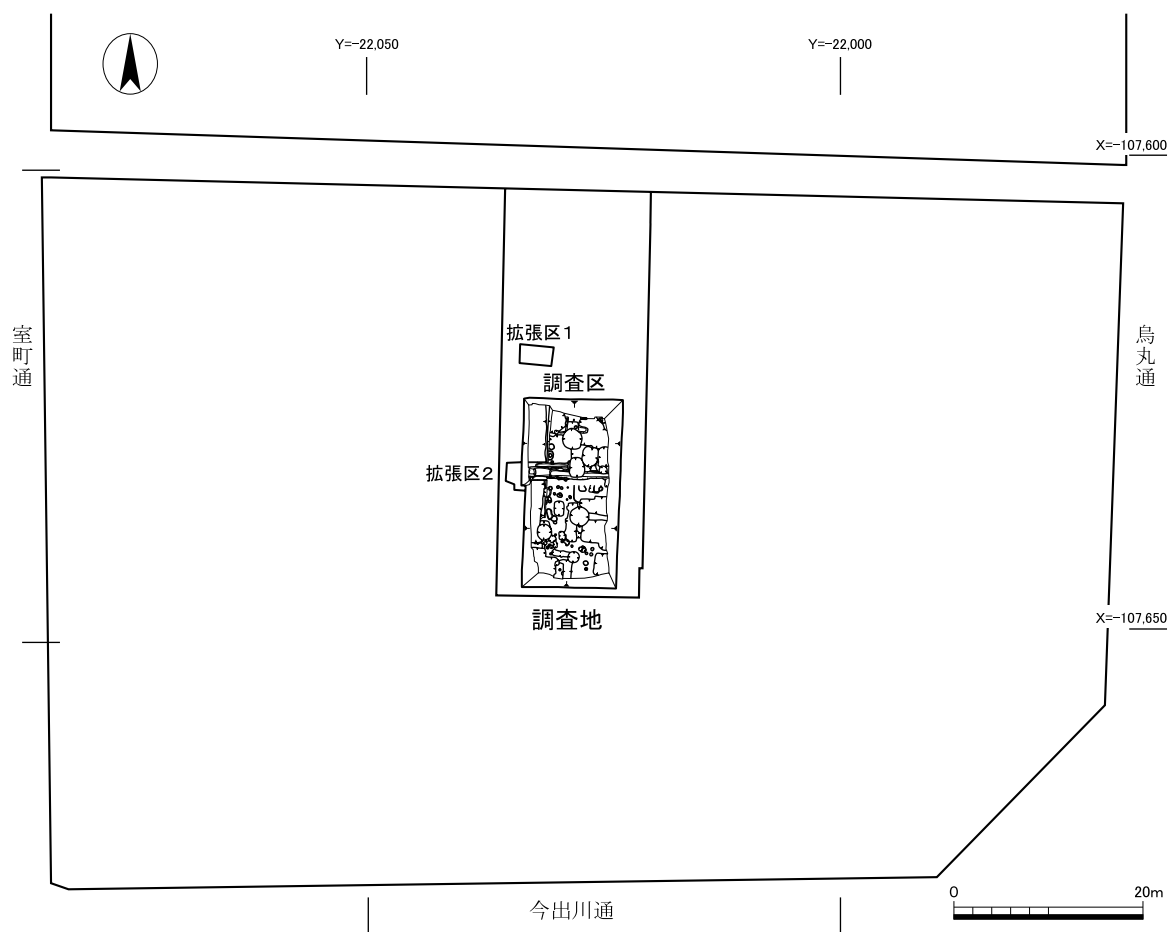


図2 調査区配置図（1：800）



図3 調査前全景（北東から）



図4 作業状況（北西から）

藤淳史氏、同志社大学歴史資料館の浜中邦弘氏の視察を受けた。

調査では、主に15世紀前半の東西溝、16世紀の柱穴列や土器溜、17世紀の建物や土器溜、18世紀の石垣などを検出した。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

今回の調査地は一条大路から約340m北に位置し、室町殿跡及び上京遺跡にあたる。

上京遺跡は、平安京北郊の市街地遺跡である。室町時代になると内裏がほぼ現在の場所に移り、その周辺に将軍・武家や公家の屋敷、寺院などが造られ市街地化した。

室町殿は、「花御所」とも呼ばれた足利将軍家の邸宅である。室町幕府三代将軍・足利義満は、永和3年(1377)2月の火災後再建が行われなかった室町家の花亭や、さらに今出川家の菊亭の土地を取得し、邸宅の造営を開始した。この邸宅は、正門が室町通に開かれたことから室町殿と呼称された。室町殿の位置については、室町以東、烏丸以西、北小路以北、柳原以南とされる。規模の詳細は不明であり、『大乘院寺社雑事記』文明11年(1479)3月6日条によれば「東西行四十丈、南北行六十丈」が、応仁の乱後の再建の際には東西・南北ともに四十丈となったと記されているにとどまる。

足利義満により誕生した室町殿は、その後四代将軍義持、五代将軍義量の時代には使用されることがなかったと考えられている。再び室町殿に御所が設けられることになるのは、六代将軍義教の時であった。義教は永享3年(1431)12月11日に室町殿に移徙した。義教が嘉吉元年(1441)に暗殺された後には、子の七代将軍義勝に引き継がれることとなる。しかし、義勝は就任後間もなく死去する。次いで八代将軍義政の時代には、当初は烏丸殿で過ごすものの、長禄3年(1459)になると室町殿に新たに御所を造立し移徙した。その後、文明8年(1476)に焼失し、再建されることなく、跡地は町屋へと姿を変えていくこととなった。

室町殿の所在については、史料上、北小路以北、柳原以南、今出川以西、室町以東の四至内に所在したとされる。現在の通り名では、それぞれ東が烏丸通、西が室町通、南が今出川通に該当するが、北限の「柳原」にあたる東西の通りの所在については明確ではない。ただし、高橋康夫氏の説では、現在の上立売通とする。規模については『大乘院寺社雑事記』の文明11年(1479)3月6日条に「室町殿は東西行四十丈、南北行六十丈之御地にあった。しかし南北行四十丈に縮小し、南方二十丈には小屋があった」と記されており、義政の時代には規模が縮小されていたと考えられる¹⁾。

調査区北側を通る小路は「片岡の辻子」と呼ばれ、天正後の開通とされる²⁾。今回の調査地は現在の岡松町にあたり、当町は明治2年までは2つの町に分かれており、二本松町と片岡町が合併したものであるとされる。また、町名の「岡松」は室町第に岡松殿があり、その跡地と想定されていることに由来するという³⁾。元禄14年(1701)の「元禄十四年実測大絵図」には勸修寺家屋敷地とされ、その後天明6年(1786)の「天明六年京都洛中洛外絵図」では裏辻の名が見られ、以後明治2年(1869)「京都御絵図」まで裏辻の名が記されている。

(2) 既往の調査（図5、表1）

調査地の周辺では試掘・立会調査を含め24回の調査が行われている。今回の調査と関連する室町時代から江戸時代における主な発掘調査成果について時代順に記載する。

室町時代

室町殿に関する遺構は、調査5で初めて確認されている。この調査では室町時代の南北方向の溝が検出されており、その位置からこの溝は室町殿の東限溝にあたると考えられている。調査8・9・10・12・13では室町殿の庭園跡が検出されており、池や景石などが見つかった。また、調査13では東西方向の溝（濠）も検出しており、この濠は室町殿の南限溝の可能性が指摘されている。調査4では、東西方向の石敷遺構を検出しており、北限の築地塀基礎と想定されている。調査11では室町殿西限と考えられる南北方向の溝（濠）が確認されている。

安土桃山時代から江戸時代

周辺の調査では、柱穴・井戸・石室など屋敷地と想定される遺構が多く確認されている。なかでも調査1では鑄造工房の跡が見つかり、調査4・24でも鑄造関係の遺構が確認されている。

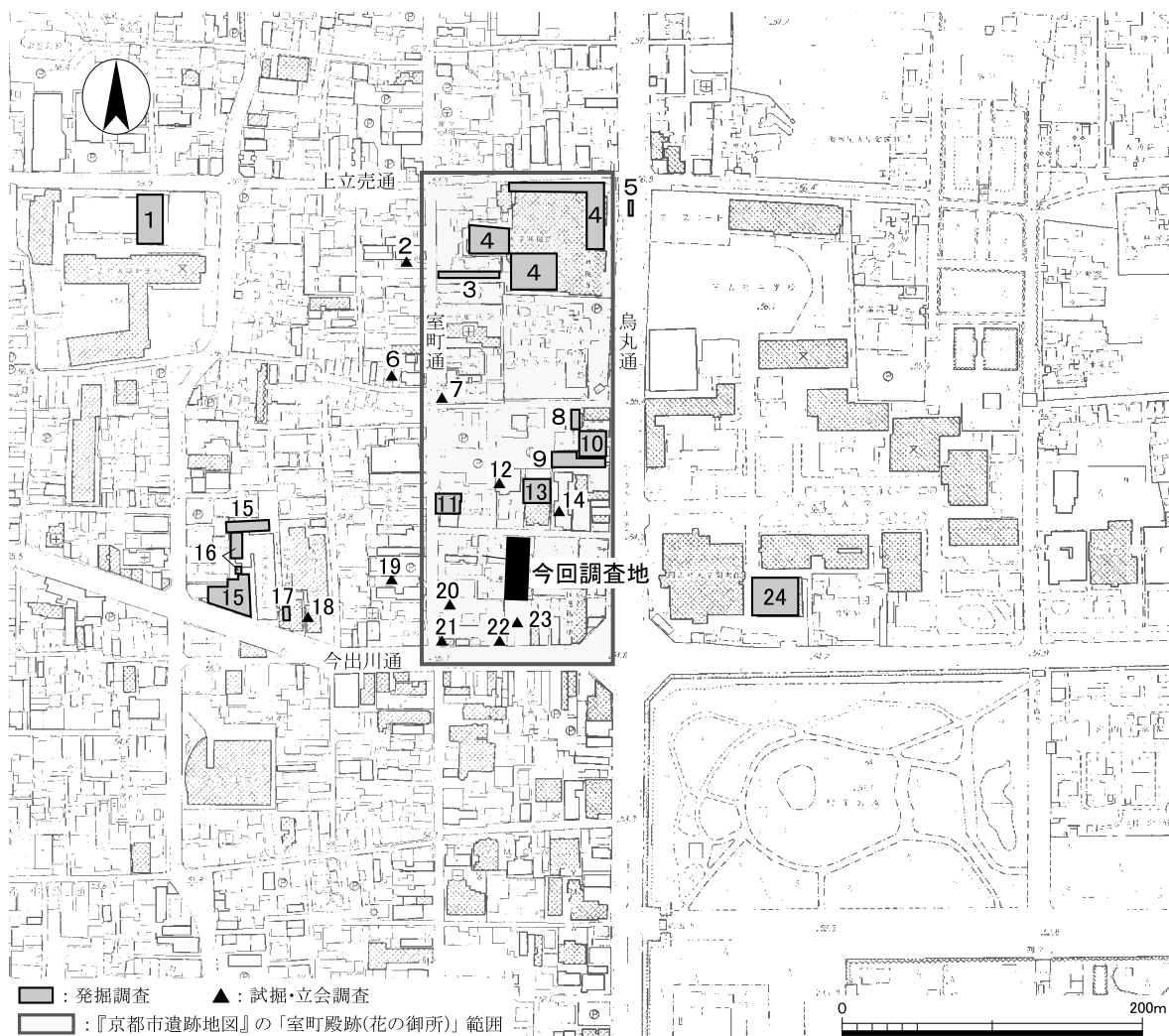


図5 周辺調査位置図（1：5,000）

表1 周辺調査一覧表

番号	調査地	調査 年度	主要な遺構	文 献
1	上京区西大路町61-1	2002	室町時代の堀。 安土桃山～江戸時代の建物・石列・石室・ 鋳造工房。	『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書―室町殿と 近世西立売町の調査―』同志社大学歴史資料館 2005年
2	上京区室町通上立売下る 裏築地町84	2002	GL-1.46mで室町時代後期の遺物包含 層、GL-2.45mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
3	上京区裏築地町	2003	江戸時代の石敷・柱列・井戸・石組・土坑。 中世以前は掘削深度の関係で未調査。	「同志社大学旧学生会館地点(室町殿)第3期発掘調 査報告」『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書 (2003・2005年度)』同志社大学歴史資料館 2007年
4	上京区御所八幡町103	2002	室町時代の柱穴・石敷遺構・石組水路。 江戸時代の建物・井戸・石組・鋳造土坑。	『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書―室町殿と 近世西立売町の調査―』同志社大学歴史資料館 2005年
5	上京区烏丸通上御霊下る 相国寺門前町	1974	室町時代の遺物包含層・溝・土坑。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
6	上京区室町通上立売下る 裏築地町97	1983	GL-0.8mで江戸時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』 京都市文化観光局 1984年
7	上京区室町通上立売下る 裏築地町98	1983	GL-0.7mで江戸時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』 京都市文化観光局 1984年
8	上京区烏丸通今出川上る 御所八幡町110-5	1986	室町時代の庭園・石組遺構・礫敷遺構。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
9	上京区烏丸通今出川上る 西入御所八幡町	1979	室町時代前期～後期の池状遺構。 室町時代後期の南北方向の溝(濠)。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
10	上京区御所八幡町110-13 他	2019	室町時代の庭園。 安土桃山～江戸時代の石室・井戸・土坑。	『室町殿跡・上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発 掘調査報告 2020-1 (公財)京都市埋蔵文化財研究 所 2020年
11	上京区築山北半町230	2018	室町時代後期の南北方向の溝(濠)。 室町時代末～江戸時代の井戸・東西方向 の溝。	『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』 京都市文化市民局 2019年
12	上京区烏丸通今出川上る 西入岡松町254-1	1985	室町時代後期の池の汀・庭石。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』 京都市文化観光局 1986年
13	上京区烏丸通今出川上る 岡松町254-2・御所八幡町 115-4	1989	室町時代後期の石組遺構・溝(濠)・築山 ・景石。 安土桃山～江戸時代の建物・塙組施設・ 石敷・石組遺構・溝。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
14	上京区烏丸通今出川上る 西入岡松町258-1	1983	室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』 京都市文化観光局 1984年
15	上京区今出川通室町西入 掘出シ町289他	2013	室町時代の布掘柱穴・柱穴・土坑。 安土桃山～江戸時代の柱穴・石室・溝・ 土坑。	『上京遺跡・室町殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発 掘調査報告 2013-8 (公財)京都市埋蔵文化財研究 所 2014年
16	上京区今出川通新町東入 掘出シ町289	1979	室町時代の南北方向の溝。 安土桃山～江戸時代の柱穴・土坑。	『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2012年
17	上京区今出川通新町東入 掘出シ町28	1978	中世末の井戸。 江戸時代の井戸・石室・土坑。	『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2011年
18	上京区衣棚通今出川上る 畠山町206他	1989	室町時代の東西方向の溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
19	上京区室町通今出川上る 築山南半町240	2009	GL-2.2mで室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』 京都市文化市民局 2010年
20	上京区室町通今出川上る 築山南半町244	2004	GL-2.44mまで江戸時代末の堆積層。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
21	上京区室町通今出川上る 築山南半町250	1985	GL-0.9m以下室町時代後期の遺物包 含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』 京都市文化観光局 1986年
22	上京区今出川通烏丸西入 今出川町319-4	1980	GL-0.35mで江戸時代の遺物包含層、 GL-0.6mで室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』 京都市文化観光局 1981年
23	上京区室町通今出川上る 築山南半町244-1他	2004	GL-1.6mで室町時代の整地層。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
24	上京区御所八幡町103	1981	室町時代後期の南北方向の溝。 江戸時代の石組溝・石組遺構・鋳造工房。	『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』 同志社大学校地学術調査委員会 1990年

これらの遺構群から、リサイクルによる鑄造工房（調査1）、鑄造と金着せなどの彫金作業を中心とした工房（調査4）、鑄造と製品製作に関わるさまざまな課程を含んだ複合工房群（調査24）が想定されている⁴⁾。そのほか今回の調査地の北側では建物や塙組施設、石敷きなどを検出しており（調査13）、寛永十四年（1637）の洛中絵図に示される「盛方院」との関連性が指摘されている。

註

- 1) 高橋康夫「第三章 足利義満の「王都」－大規模開発と地域空間形成」『海の「京都」－日本琉球都市史研究』 京都大学学術出版会 2015年
- 2) 「京都坊目誌」『新修 京都叢書 第18巻』 臨川書店 1968年
- 3) 「岡松町」『日本歴史地名大系 第27巻 京都市の地名』 平凡社 1987年
- 4) 松田度「中・近世上京の鑄造工人」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第4集 学生会館・寒梅館 地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』 同志社大学歴史資料館 2005年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版4・5)

調査地の現地表の標高は55.0～55.2mである。現地表面から0.1～0.2mが現代盛土で(北壁・東壁1層)、その下に厚さ0.15～0.4mの近代整地層(北壁2層、東壁8・9層)があり、以下、天明大火(1788)の焼土層(東壁10層)、江戸時代中期の整地層(整地層3、北壁14・15層、東壁20層)、延宝3年(1675)の焼土層(東壁26層)、安土桃山時代から江戸時代前期の整地層(整地層2、北壁16～18層、東壁51・52層)がある。さらにその下には室町時代後期の整地層(整地層1、東壁79層)がある。この整地層1は、最大0.4mの厚さで堆積する。さらにその下が基盤層(北壁30・31層、東壁82・83層)となる。基盤層は褐色シルト層と砂礫層がみられ、調査区北半部ではシルト層の下に砂礫層がある。調査区南半部では、整地層1直下が砂礫層となる。基盤層上面の標高は53.0～53.2mである。

調査は、整地層2の上面を第1面(安土桃山時代から江戸時代中期)、整地層1の上面を第2面(室町時代後期)、基盤層上面を第3面(室町時代前期)として調査を行った。

(2) 第3面の遺構 (図版1・14)

基盤層上面で検出した遺構群である。柱穴群や東西溝を検出した。調査区北側で柱穴群を確認したが、建物としてのまとまりを捉えることはできなかった。

柱穴277 調査区北東部で検出した。掘形の平面形は円形で、径約0.45m、検出面からの深さは約0.2mである。埋土には0.1～0.2mの礫が混じる。東部と南西部は失われている。

柱穴278 調査区北側で検出した。掘形の平面形は円形で、径約0.3m、検出面からの深さは約0.05mである。

柱穴279 調査区北端で検出した。南側が失われるが、掘形の平面形は円形で、径約0.4m、検出面からの深さは約0.1mである。埋土には0.1～0.15mの礫が混じる。柱穴277と同様、埋土に礫が含まれ関連する遺構と想定される。

柱穴280 調査区北端で検出した。東側を柱穴279により失われている。残存長南北0.07m、東西0.15mである。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代	溝269・271、柱穴149・277・278・279・280、柱穴列2、土器溜184、土坑282、石室256、三和土203、土取土坑272・274・275・281	
安土桃山時代 ～江戸時代	建物1(礎石1～6、据付穴31・56・190、カマド33・41・68、土坑20・37・150・151・270、布掘地業55、三和土290)、柱穴列1、土器溜147、土坑17・77・143・197・284、集石71、石室128、土取土坑186、石垣50、井戸6	

溝269(図6) 調査区中央で検出した。東西方向の溝である。検出長は約3.4mで、幅は約0.4mである。検出面からの深さは約0.1mある。底部の標高は西が東より0.03m低い。黒褐色粘土に炭を含む土で埋め戻されたと考えられる。

溝271(図6、図版14・15) 調査区中央で検出した。東西方向の溝である。検出長は約8.5mで、幅は0.8~1.2mである。検出面からの深さは0.17~0.47mである。調査区西側のY=-22,031付近から西へ約1.5mの範囲で約0.32mほど浅くなる。底部の標高は東が西より0.03m低い。溝の底部には細砂が堆積し、溝内には水流があったことがわかる。

(3) 第2面の遺構(図版2・15)

16世紀前半から中頃の遺物を含む整地層1上面で検出した遺構群である。土取土坑、三和土、柱穴列、土器溜などを検出した。

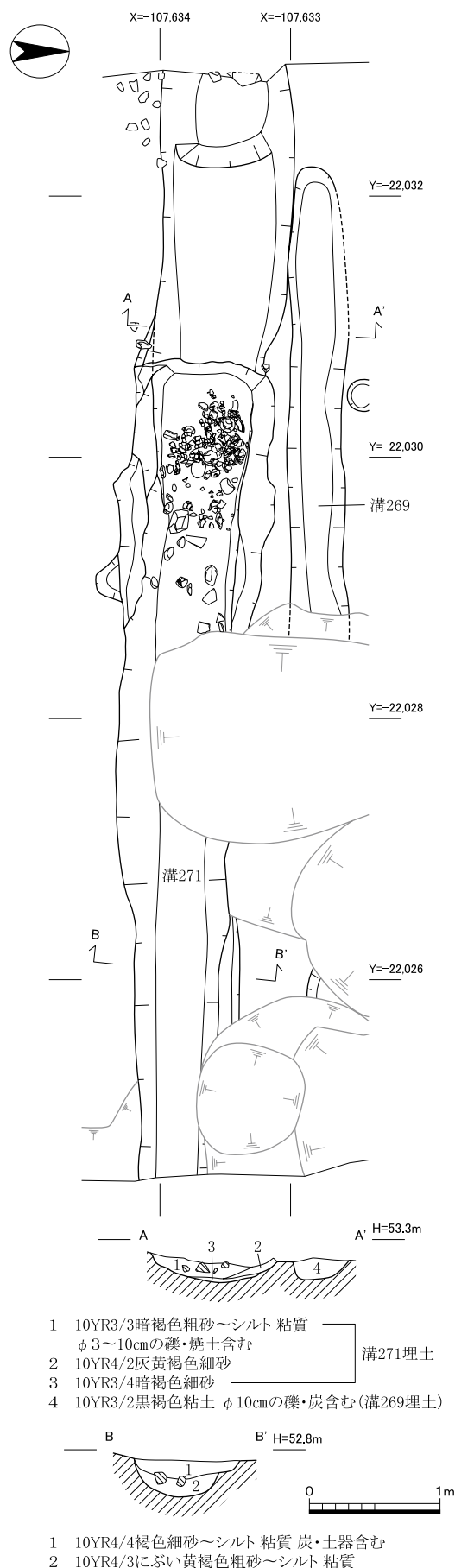
土取土坑272・274・275・281 調査区の北東で整地層1掘り下げ中に検出した土坑群である。いずれも底面は砂礫層上面で止まることから、土採掘のための土取土坑と考えられる。

土取土坑272の平面形は不定形である。北東部は土取土坑281に南東部は土坑270により失われる。東側は調査区外となる。検出規模は、東西約2.6m、南北約2.6mで、検出面からの深さは最深部で約1mである。

土取土坑274の平面形は円形で、東側を土坑270により失われる。径約1.5mで、検出面からの深さは最深部で約0.5mある。

土取土坑275の平面形は楕円形で、北側を土坑270により失われ、東側は調査区外となる。

土取土坑281の平面形の全容は不明で、北側は攪乱を受け、東側は調査区外となる。検出規模は東西南北約1mで、検出面からの最深部は約0.5mである。



土坑282 調査区北西部で石垣50の断割後に検出した。西側を土坑284により失われている。東西1.7m以上、南北1.5m以上ある。

土器溜184 (図版6・16) 調査区西部で検出した。平面形は楕円形で西側を石垣50により失われている。東西約0.6m、南北約0.9mで、検出面からの深さは約0.35mある。完形品とそれに近い土師器皿が埋土上層から折り重なって出土した。

柱穴149 (図版6・16) 調査区中央、土器溜184の東側で検出した。掘形の平面形は不定円形で、東西約0.65m、南北0.7mである。径0.2mの柱痕跡を確認した。検出面からの深さは約0.3mである。掘形上部北東よりで完形の土師器皿5枚が出土した。東側で検出した完形土師器皿は2枚が重ねられ、いずれの皿にも底部に炭片が見られた。

三和土203 (図版16) 調査区北東部で検出した。北側は攪乱を受け、南側も土坑270により失われている。検出範囲は東西約2.4m、南北約2.8mある。厚みはなく褐色のシルトに径0.02～0.1mの礫を入れて固めており、整地上面の仕上げと考えられる。

石室256 (図版6) 調査区東端中央で検出した。平面形が馬蹄形と考えられる。東側は調査区外となるため不明である。掘形は南北約2.1m、東西1.1m以上で、深さは検出面から約0.8mである。床面として北半部1mは粘土を貼り、南半部は基盤層を利用している。北側では0.1～0.2m大の礫を5段、西側では0.2～0.3m大の礫を粗く積む。また、南側の張り出し部は床面より約0.2m高くなり、平面に石を敷いている。階段状の構造も想定されるが、1段にとどまっている。壁の石の積み方が粗く、カマドの一部であった可能性も考えられる。

柱穴列2 (図7) 調査区南側で検出した。柱穴は重複がみられる。柱間は柱穴170・144・152・182で1.1～1.5mと不揃いである。柱穴列を構成する柱穴は径0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mである。また、柱穴155・153は柱穴144・152を切っており、造り変えがなされたと考えられる。柱穴列は北に対して5度東に振る。

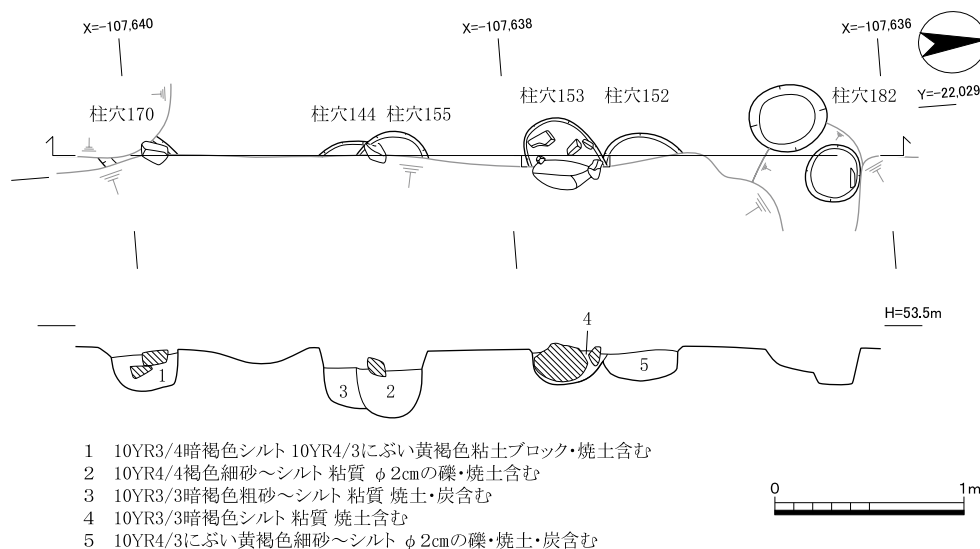


図7 柱穴列2実測図 (1:40)

(4) 第1面の遺構(図版3・17)

建物1(図版7・17・18) 調査区北東部で布掘地業55、据付穴31・190、礎石1～6、三和土290、カマド33・41・68、土坑20・37・150・151・270で構成される建物1を検出した。以下、構築順に説明する。

布掘地業55(図版7・18) 建物1の南西部で検出した。東西3.7m以上、南北3.0m以上ある。建物1の南端、東西方向の布掘りは深さ約0.3m掘削し、0.1～0.2m大の礫混じりのにぶい黄褐色粘土を含む暗褐色の粘質細砂で埋めて固めている。ただし、南北方向の布掘りは、約0.1mと浅い。断面F-F'の状況から、布掘地業を施した後、礎石を据え、褐色のシルトを貼って壁が造られたと考えられる。

礎石1～6(図版7) 礎石1は建物1北部で検出した。大きさは長辺0.4m、短辺0.35m、厚さ0.35mで、褐色の細砂～シルトの壁土に覆われていた。礎石2は建物1西部で検出した。大きさは長辺0.35m、短辺0.3m、厚さ0.3mで、褐色の細砂～シルトの壁土に覆われていた。礎石の上面が壁土に覆われることから、建物の修繕が考えられる。礎石3は礎石2の南側で検出した。大きさは東西0.45m、南北0.4m、厚さ0.25mである。礎石2と礎石3の間は0.9mある。礎石4は調査区東端で検出した。東西0.4m、南北0.5m、厚さ0.25mである。礎石の北西寄りに径0.15mの円形の柱の焼失痕跡を確認した。礎石5は礎石4の北側で検出した。大きさは東西0.35m、南北0.3m、厚さ0.3mある。礎石4と礎石5の間は0.9mある。礎石6は調査区北東部で検出した。被熱に伴うものか摩滅が激しい。大きさは長辺0.4m、短辺0.3mある。

据付穴31(図版7) 建物1東部で検出した。掘形の平面形は円形で、径約0.6m、深さは約0.3mある。礎石を固定するための0.2～0.3m大の根石が埋設されている。

据付穴56(図版7) 建物1北部で検出した。掘形の平面形は楕円形で、東西0.6m、南北約0.5mある。

据付穴190(図版7) 建物1東部で検出した。礎石5を据え付けるための据付穴である。平面形は半円形を呈する。東西0.5m、南北0.8m、深さ0.35mである。

三和土290(図版7) 建物1南部と西部で検出した。褐色のシルトに径0.03mの礫を用いて固めている。

カマド33・68(図版7・18) 建物1東部で検出した。礎石4・5の西側に南北に並列する。平面形は円形状の穴が重複する。掘形はいずれも径約1mある。カマド33の南側では約0.2m大の礫を検出し、その周辺に炭が多く見られた。南西部では志野の銅鑼鉢が床面に貼りついて出土した。

カマド41(図版7) 建物1北部で検出した。平面形は不定形である。東西約1.5m、南北約0.8mある。西側には焼土と炭がみられる。

土坑37・150・151(図版7) 建物1西部で検出した。南北に並んで検出した土坑群である。北から土坑37・150・151となる。土坑37からは備前産焼締陶器・大甕の口縁部片が出土しており、これらの土坑は甕据付穴と考えられる。平面形はいびつな円形で、いずれも径約0.8mある。深

さは検出面から約0.4～0.5mである。また、土坑37には大量の焼けた壁土が埋められていたことから、建物焼失後、火災処理土坑として利用されたと考えられる。

土坑270（図版7） カマド33・68の下層で検出した。平面形は隅丸方形で、東は調査区外へ続く。東西1.2m以上、南北約2mある。深さは約1mで、基盤層の砂礫層まで掘り抜かれている。

土坑20（図版7） 建物1南西部で検出した。平面形は不定形で、東西約0.9m、南北約1.0mである。0.05～0.3m大の礫で埋められている。集水枳と想定される。

次に建物1以外の遺構について述べる。

土坑197 調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形で、北側は攪乱により失われている。現状での掘形は東西約2m、南北約3mで、検出面からの深さは約0.1mである。

土坑143（図版6） 調査区中央部で検出した。平面形は不定形で、東西約1.2m、南北約1.7mある。検出面からの深さは約0.7mである。埋土には炭層が見られた。埋土からは多量の土師器皿や施釉陶器などが出土した。

土坑284 調査区北西部で検出した。平面形は不定形で、東西約1.0m、南北約2.2mである。検出面からの深さは約1.2mである。石垣50の石組が抜き取られ、根石が一部残されていたことから、石垣の石の抜き取り穴と考えられる。

土坑77 調査区中央部で検出した。東側は土坑20でにより失われる。平面形は半円形で、径約0.5m、深さ約0.2mある。径0.05m大の礫で埋められていた。

土坑77 調査区東部で検出した。平面形は長方形で、東西約1.1m、南北約1m深さ約2mある。東は調査区外となる。

土取土坑186 調査区北西部で検出した。平面形は不定形で、東西約1.6m、南北約2.2mで、検出面からの深さは約1mである。

土器溜147（図版6・18） 調査区中央部西側で検出した。西側は確認できていない。検出した平面形は半円形である。検出面での現状は東西0.85m、南北0.35mで、検出面からの深さは0.3mである。完形及びそれに近い土師器皿が土坑の南西部に集中して出土した。そのほか平瓦片や施釉陶器片も出土した。埋土には炭、焼土を含む。

柱穴列1（図8） 調査区南側で検出した。柱間は1.0～2.6mと不揃いである。柱穴列を構成する柱穴は径0.3～0.5m、深さ約0.2mである。柱穴列は北に対して東に1度振る。

集石71（図版8・19） 調査区南東部で検出した。平面形は不定形である。掘形は東西約1.8m、南北約2.6m、0.05～0.2m大の礫（河原石）で埋まる。検出面からの深さは約1.1mである。

石室128（図版8・19） 調査区南東部で検出した。平面形が方形の石室である。東側は調査区外となり、西側は集石71により失われている。掘形の残存長は東西約1.2m、南北約2.5mで、深さは検出面から1.1mある。西に長辺0.4～0.5mの礫を積む。

石垣50（図版9・20・21） 調査区西部で検出した、西面する南北方向の石垣である。北に対して1度西へ振る。検出長は約14.8mで、北側は調査区外へ延びる。また、X＝－107,641付近で掘形

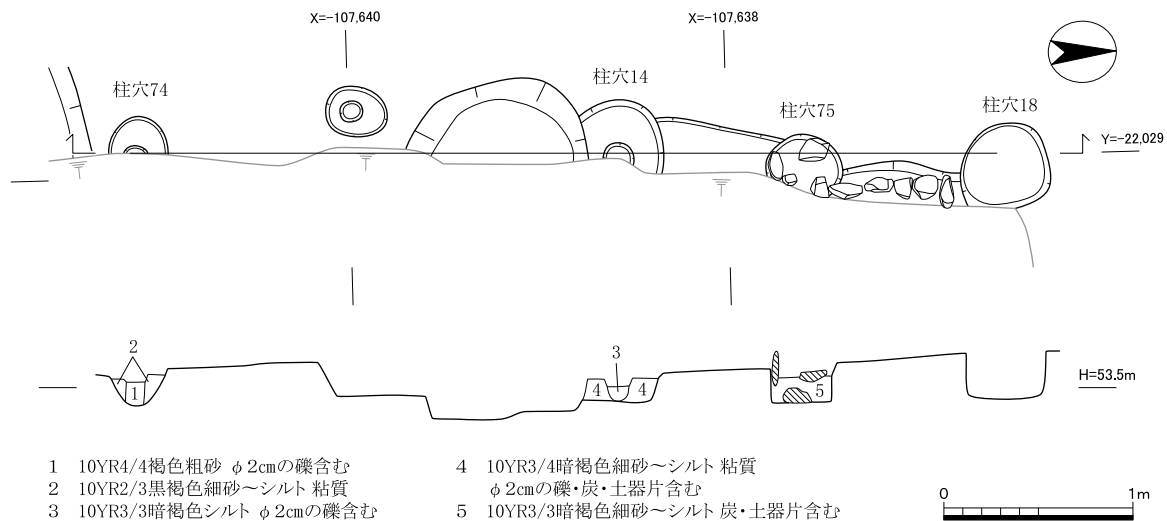


図8 柱穴列1実測図（1：40）

の南端を、拡張区1では掘形の北端と裏込め石（河原石）を検出したことから、全長約20mに復元できる。残存高は約0.8mであるが、上部は削平を受けている。長辺0.4～0.8mの石を3段以上積み上げる。石材はチャート・花崗岩・砂岩を用い、矢穴痕跡のみられる石材（図版21－2）がある。また被熱痕跡がみられるものもあるが、石垣の埋土には焼土層が顕著にみられず、これらの石材は転用されたと考えられる。掘形は幅約1.6m、深さ1.6m以上で、裏込め石には径0.1～0.3mの礫（河原石）を使用する。

井戸6 調査区中央部で検出した。平面形は円形で、掘形は径2m、深さ約1.1mある。井戸枠など内部の構造物は残っていなかったが形状から井戸と考えられる。

4. 遺 物

遺物は、整理コンテナに53箱出土した。出土遺物には土器・陶磁器類、瓦類、土製品、石製品、銭貨・金属製品、鑄造・鍛冶関連遺物がある。全体の約9割を土器・陶磁器類・瓦類が占める。遺物の帰属時期は平安時代から江戸時代までの各時期である（表3）。

なお、土器・陶磁器類の個別の詳細については巻末の附表1にまとめた。

土器の年代観¹⁾については平尾政幸氏の編年案による。

（1）土器・陶磁器類

室町時代の土器

溝271出土土器（図版10・22 1～23） 土師器が大半を占め、少量の瓦器・輸入陶器がある。土師器には皿Sh（1～3）、皿S（4～9・10～12）、皿N（13～17）、ロクロ成形による皿・椀（18～20）がある。皿Shは口径7.0cm前後、底部中央を上方に突出させる。皿Sには口径8.0cm前後（4～7）、口径12.2cm（11）と15.8cm（12）がある。皿Nには9.1cm前後（13～15）、12.0cm前後（16・17）の2群がある。皿Nは平底からの立ち上がりの屈曲が強い。瓦器は火鉢（21）と鍋（22）がある。火鉢は浅型である。鍋は体部が外方に開き、口縁部に蓋受けがつく。内面にはハケメ調整がみられる。輸入陶器は盤（23）の底部がある。華南地方の産地が想定される。これらの土器群は9 A段階に属する。

土器溜184出土土器（図版10・22 24～54） 土師器が大半を占め、少量の瓦器・輸入白磁がある。土師器には皿Sb（24～31）、皿S（32～54）がある。皿Sbは口径8.5cm前後である。皿Sには口径10.5cm前後（32～36）、11.3cm前後（37～40）、13.4cm前後（41～45）、13.6cm前後（46～52）、15.0cm前後（53・54）の5群がある。これらの土器群は10 B段階に属する。

柱穴149出土土器（図版10・22 55～58） 土師器のみ完形5点が出土した。土師器には皿Sb（55）と皿S（56～58）がある。これらの土器群は10 B段階に属する。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代 ～鎌倉時代	土師器、瓦類		瓦類2点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、 輸入陶器、瓦類		土師器55点、瓦器2点、輸入陶器 1点		
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、瓦器、焼締陶器、 国産陶磁器、輸入磁器、 瓦類、土製品、石製品、 銭貨・金属製品、鑄造・ 鍛冶関係遺物		土師器92点、瓦器1点、焼締陶器 5点、国産陶磁器27点、輸入磁器 5点、瓦類21点、土製品7点、 石製品12点、銭貨5点、金属製品 16点、鑄造・鍛冶関係遺物5点		
合 計		74箱	256点（19箱）	2箱	53箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A・Bランクの遺物を抽出したため、出土時より21箱多くなっている。

江戸時代の土器

土坑270出土土器 (図版10・22 59～69) 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。土師器には皿Sb (59・60)、皿S (61～64)、炮烙 (65・66) がある。皿Sbは口径9.5cm前後、皿Sは口径10.6cm前後 (61・62) と12.0cm前後 (63・64) の2群がある。炮烙 (65) は外面をケズリ調整している。焼締陶器には信楽産擂鉢 (67) がある。外方に小さく折れ曲がる口縁で、櫛目の単位は5本である。内面底部付近は使用痕で平滑になる。輸入磁器には中国産染付の皿・椀 (68・69) がある。これらの土器群は11 A段階に属する。

石室128出土土器 (図版11・23 70～80) 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付・輸入磁器がある。土師器には皿N (70)、皿S (71～74)、埴塙 (75)、羽釜 (76) がある。皿Nは口径5.7cmある。内・外面が黒色に変色している。皿Sは口径10.6cm前後 (71～73) と12.5cm前後 (74) の2群がある。71・72は内面が黒く変色し煤も多く付着する。外面には繊維を含む硬化した土・壁土のようなものが付着しており、内面口縁部にも一部付着している。埴塙 (75) は内面及び外面口縁部付近の一部にスラグが付着する。また還元炎により熱を受け灰色に変色している²⁾。羽釜 (76) は膨らんだ胴部下段に鐙が付き、口縁部は外反し端部は上方に小さく突出する。土師器皿と同様に外面に硬化した土が付着する。皿71・72や羽釜76は土などで固定し、使用された可能性が考えられる。施釉陶器には皿 (77・78)、椀 (79)、盃 (80) がある。皿は美濃の灰釉折縁ソギ皿。椀は美濃系の鉄釉天目茶椀。盃は灰釉を施す。高台部のみの残存のため図化していないが、京都産の軟質施釉陶器がある。赤褐色の胎土で内面に透明釉、外面に白土化粧を施す。これらの土器群は11 A段階に属する。

整地層2出土土器 (図版11 81) 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。小片のため図化できたのは輸入磁器の青磁椀 (81) のみである。いわゆる人形手茶椀である。内面に人物、竹林と草庵が描かれ、外面口縁部に雷文がめぐる。

土坑197出土土器 (図版11 82) 82は施釉陶器の皿である。内面に水銀朱が付着する。高台内面に目痕が残る。10 C～11 A段階に属する。

土取土坑186出土土器 (図版11・23 83～92) 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器・埴塙がある。土師器は皿Sb (83) と皿S (84～87) がある。皿Sbは口径10.4cm、皿Sは口径11.0cm前後 (84・85) と12.0cm前後 (86・87) の2群がある。施釉陶器は皿 (88・90) と蓋 (91) がある。皿は美濃産の灰釉折縁ソギ皿 (88・89) と灰釉のかかった皿 (90) がある。いずれも底部内面に輪トチン痕跡がみられる。蓋は上面に灰釉がかかる。二次被熱を受ける。輸入磁器は椀 (92) がある。五彩で花鳥文を施す。

埴塙は小片のため図化していないが、口縁部の一部である。内面にスラグが付着する。埴塙 (75) より器壁が厚く粗雑なつくりである。これらの土器群は11 A～B段階に属する。

カマド33出土土器 (図版11・23 93) 土師器・施釉陶器がある。土師器は小片のため図化していない。施釉陶器は志野銅鑼鉢 (93) である。見込に鉄釉で文様を描く。草文か。これらの土器群は11 A～B段階に属する。

土坑37出土土器（図版11・23 94～99） 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。土師器には皿S（94・95）がある。口径は10.0cmである。施釉陶器には織部向付（96）がある。量産される時期のものと考えられる。二次被熱を受け釉薬が沸騰した痕跡がみられる。焼締陶器には信楽・伊賀産水差（97）と備前産大甕（98・99）がある。これらの土器群は11 A新～B段階に属する。

据付穴56出土土器（図版11 100・101） 土師器がある。土師器には皿S（100・101）がある。100は口径10.5cm、101は13.9cmである。いずれも凹状圈線がはっきりしてきている。これらの土器群は11 B段階に属する。

土坑143出土土器（図版11・12・23 102～136） 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。土師器には皿N（102～111）、皿Sb（112～115）、皿S（116～131）、炮烙（132）がある。皿Nは口径5.5cm前後（102～105）、6.5cm前後（106～109）、7.3cm前後（110・111）の3群がある。皿Sbは口径10cm前後である。皿Sは口径10.5cm前後（112～117）、11.1cm前後（118～127）、12.5cm前後（128～131）の3群がある。炮烙（132）は口径30.8cmで、口縁部を継ぎ足している。瓦器は火鉢（133）がある。平底に足がつき浅く広い。体部に焼成後に穿たれた穿孔がみられる。施釉陶器には長石釉菊皿（134）、魚の形を模した灰釉皿（135）がある。焼締陶器は播鉢（136）がある。櫛目の単位は7本である。底部に糸切痕跡がみられる。内面底部の櫛目は中心から放射状に施される。産地は不明である。これらの土器群は11 A新～B段階に属する。

土器溜147出土土器（図版12・24 137～164） 土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器がある。土師器には皿N（137～139）、皿Sb（140・141）、皿S（142～162）がある。皿Nは口径5.3cm（137）と口径6.0cm前後（138・139）の2群がある。皿Sbは口径10cm前後。皿Sは口径10.6cm前後（142～145）と11.1cm前後（146～158）と11.4cm前後（159～162）の3群がある。施釉陶器には美濃産皿（163）、唐津産皿（164）がある。美濃の皿は口径11.6cm。長石釉で無文、総掛け。唐津の皿は口径13.2cm。無文の折れ縁皿。目痕が残る。これらの土器群は11 B段階に属する。

炭層（東壁27層）出土土器（図版12 165～167） 建物1を覆う炭層から出土した。土師器・輸入磁器がある。土師器は皿S（165・166）がある。輸入磁器は景德鎮窯系の染付椀（167）がある。これらの土器群は11 B～C段階に属する。

石垣50埋土下層出土土器（図版12 168～174） 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付・輸入磁器がある。土師器は皿N（168）、皿S（169・170）、小壺（171）がある。皿Nは口径5.1cm、皿Sは口径10.9cmと13cmである。施釉陶器には皿（172・173）、半筒椀（174）がある。皿にはいずれも長石釉が施される。これらの土器群は11 B新段階に属する。

石垣50埋土上層出土土器（図版12 175～185） 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。土師器は皿N（175）、皿Sb（176）、皿S（177～179）がある。皿Nは口径6.0cm、皿Sbは口径9.7cm、皿Sは口径10.7cmと11.9cmである。施釉陶器には唐津産椀（180）と美濃系鉄釉天目茶椀（181）がある。磁器の染付は皿（182）と椀（183～185）がある。椀の底部内面には「宣明年化」と「宣明」の文字がみられる。これらの土器群は12 A段階に属する。

井戸6出土土器（図版12 186・187） 土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入磁器がある。186・187は肥前系磁器の染付椀である。いずれも十六弁の菊花文が描かれており、禁裏御用品である。18世紀代と考えられる。

重機掘削中出土土器（図版12 188） 188は肥前系磁器の染付皿である。十六弁の菊花文が描かれており、禁裏御用品である。

（2）瓦類

軒丸瓦（図版13・24 瓦1～13） 軒丸瓦は17点出土した。文様は巴文が15点、木瓜文が1点、不明が1点である。瓦1は木瓜文軒丸瓦である。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。瓦当凸面は横方向にナデる。表面採集したものである。瓦2～10は右巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦2は珠文が二重にめぐる。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。土坑284から出土した。瓦3の胎土は緻密で、焼成は堅緻である。土坑37から出土した。瓦4の胎土は粗く、焼成はやや軟質である。瓦当凸面を縦方向にナデる。土坑282から出土した。瓦5の胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。整地層2から出土した。瓦6の胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。範傷が多い。石室128から出土した。瓦7・8の胎土は緻密で、焼成はやや軟質である。瓦7は石室128から出土した。瓦8は石垣50埋土上層から出土した。瓦9の胎土はやや粗く、焼成はやや軟質である。土坑17から出土した。瓦10の胎土はやや粗い。二次被熱を受ける。整地層2から出土した。瓦11・12は左巻きの三巴文軒丸瓦である。瓦11の胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。範傷が多い。瓦12の胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。範傷がみられる。いずれも石室128から出土した。瓦13の文様は不明である。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。外区に金箔を施す。整地層2から出土した。

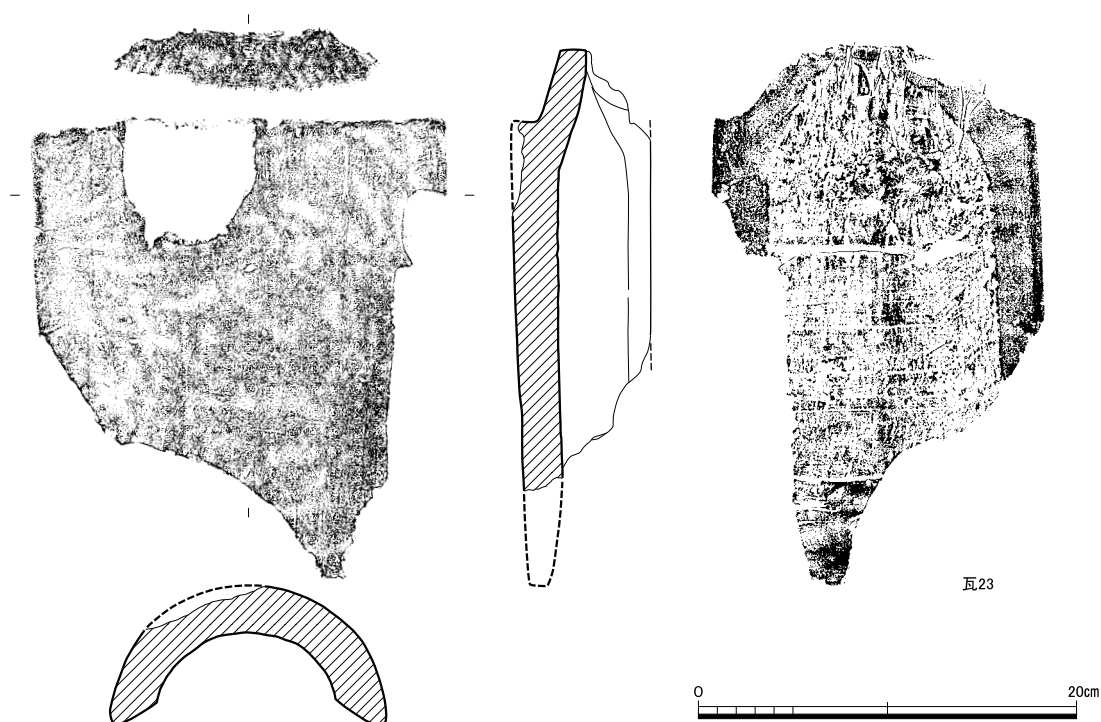


図9 丸瓦拓影及び実測図（1：4）

軒平瓦（図版13 瓦14～21） 軒平瓦は10点出土した。唐草文が7点、剣頭文が1点、不明が2点である。瓦14は均整唐草文である。平城宮6732型式か。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。凹面に布目が残る。土取土坑274から出土した。瓦15は剣頭文である。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。顎部を強く横ナデする。土取土坑272から出土した。瓦16～21は唐草文である。瓦16は中心飾りに花文がある。胎土はやや粗く、焼成は堅緻である。顎部を横方向にナデするが粗雑である。石室128から出土した。瓦17・19は同文の可能性がある。顎貼り付けで、顎部を丁寧に横ナデする。いずれも胎土は緻密で、焼成はやや軟質。瓦17は石室128から、瓦19は整地層2から出土した。瓦18は顎貼り付けで、顎部は横ナデするが粗雑である。胎土は緻密で、焼成は堅緻である。土坑143から出土した。瓦20の胎土は緻密で、焼成は堅緻である。顎貼り付けで、接合面にカキヤブリ痕跡が見られる。顎部は丁寧に横ナデし、瓦当凹面は縦方向にナデする。石室128から出土した。瓦21は顎貼り付けで、瓦当部が薄い。胎土はやや粗く、焼成はやや軟質。石室128から出土した。

道具瓦（図版13 瓦22） 瓦22は道具瓦である。1点出土した。棟端飾瓦か。表面に一部金箔を施す。据付穴190から出土した。

丸瓦（図9 瓦23） 丸瓦である。凸面は縦方向のケズリ。玉縁部の凸面は横ナデ。凹面にはコビキB、布目の痕跡が残り、側縁は幅広い面取りを施す。全長約28cm。整地層2から出土した。

（3）土製品（図10、図版24）

江戸時代の遺構や整地層から土人形や埴が出土した。土1は土人形の馬の胴部である。上部には鞍が表現されている。石垣50埋土上層から出土した。土2は、土人形の頭部である。井戸6から出土した。土1・2ともに型成形で、表面にキラ粉が付着している。土3は、土人形の女性立像である。上・下部が欠損する。拡張区2で出土した。土4はミニチュアの涼炉である。体部に穿孔がある。底部に脚をつける。土5は金剛鈴。東部は欠損する。束の根本に0.2cmほどの穿孔がみられる。

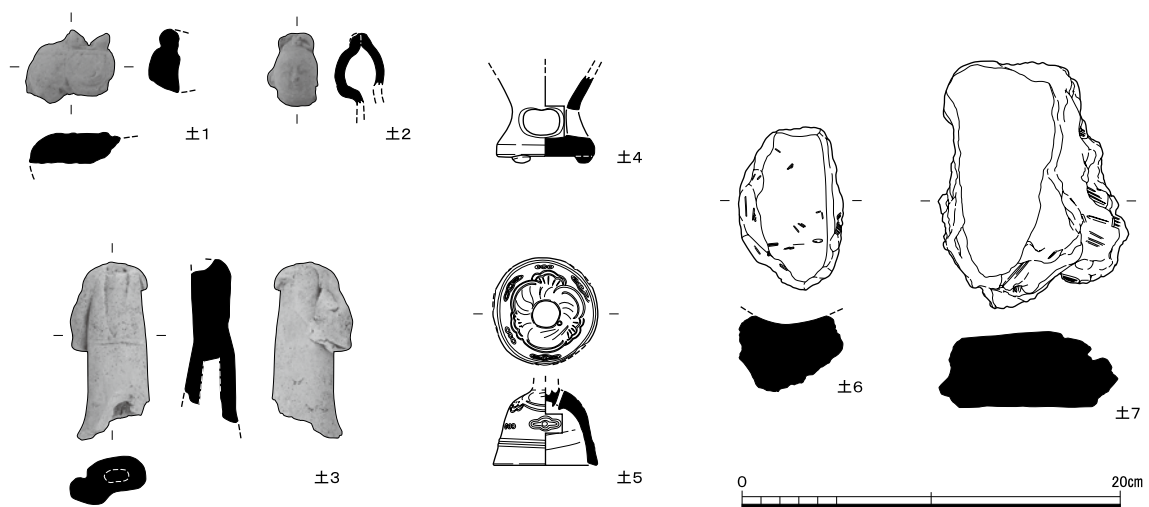


図10 土製品実測図（1：4）

いずれも井戸6から出土した。土6・7は壁土である。2次被熱を受けて明褐色に変色している。壁土に混ぜられた藁などの植物の痕跡がみられる。いずれも土坑37から出土した。当遺構からは同様の二次被熱を受けた壁土がコンテナ2箱分出土した。

(4) 石製品 (図11)

砥石が多い。他に硯、碁石、塼状の石製品、石臼、滑石などが出土した。砥石は42点、硯は3点ある。石1～6は砥石である。いずれも粘板岩系の石材で仕上げ用の砥石である。石1は土器溜147から、石2・6は土取土坑186から、石3は整地層2から、石4はカマド33から、石5は土坑143から出土した。石7・8は碁石である。石7は半透明である。第1面検出中に出土した。石8は黒色である。土坑270から出土した。石9は硯である。裏面に文字「□□ 小山内 上甲景之所 □ 好」と彫られ、その上に朱墨で文字が書かれている。表面採集である。石11・12は石臼である。石11は茶臼の上臼で、子持菱の装飾がある挽手穴が残る。表面採集である。石12は下臼である。土坑77から出土した。

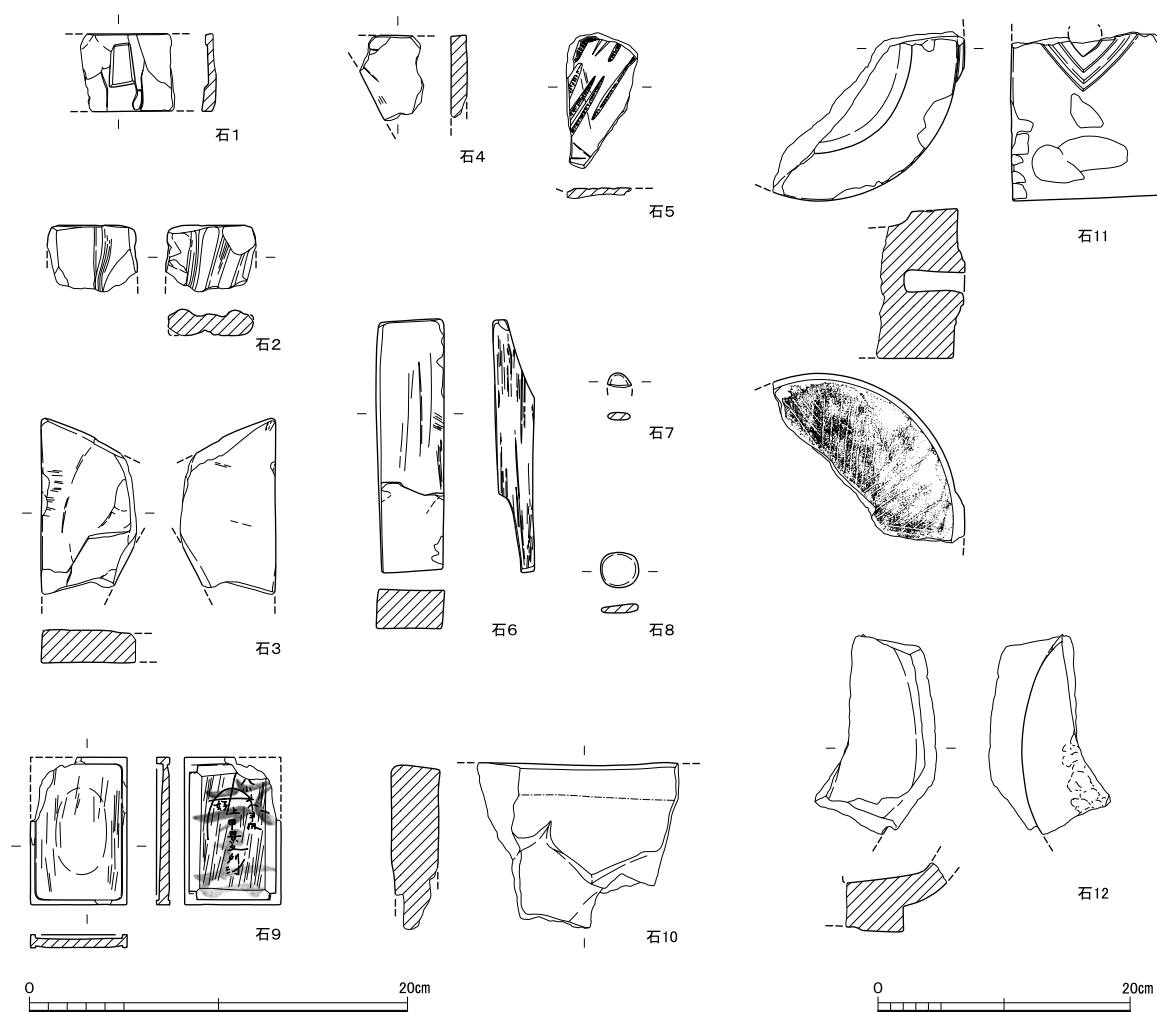


図11 石製品実測図 (1 : 4、石11・12のみ1 : 6)

(5) 銭貨・金属製品

銭貨 (図12) 銭貨は8枚出土した。このうち銭種がわかる5枚を図示した。銭1は開元通寶である。土坑260から出土した。銭2・3は元豊通寶である。いずれも書体は行書。銭2は第2面の遺構検出中に出土した。銭3は石垣50の裏込めから出土した。銭4は紹聖元寶である。書体は行書。据付穴56から出土した。銭5は元祐通寶である。書体は篆書。整地層2から出土した。

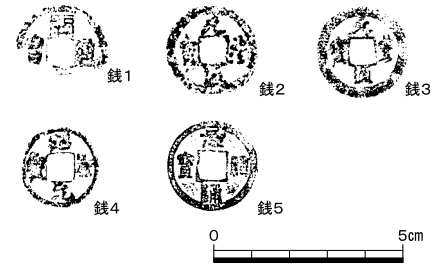


図12 銭貨拓影 (1 : 2)

金属製品 (図13、図版24) 金1は鉄砲の弾丸である。成分は大半が鉛である。整地層2から出土した。³⁾

金2～10は銅製品である。金2は釘隠しである。細かい牡丹文が施される。円形金具で中央に穴はなく座金具ではない。鍛造か。土取土坑186から出土した。金3は瓔珞。同一遺構から同様の個体が他1点(付章 表1-No.11)出土している。真鍮製。据付穴56から出土した。金4は引手金具。銅製。土坑151から出土した。金5は目貫。表面に鍍金痕跡がみられる。铸造か。土坑128か

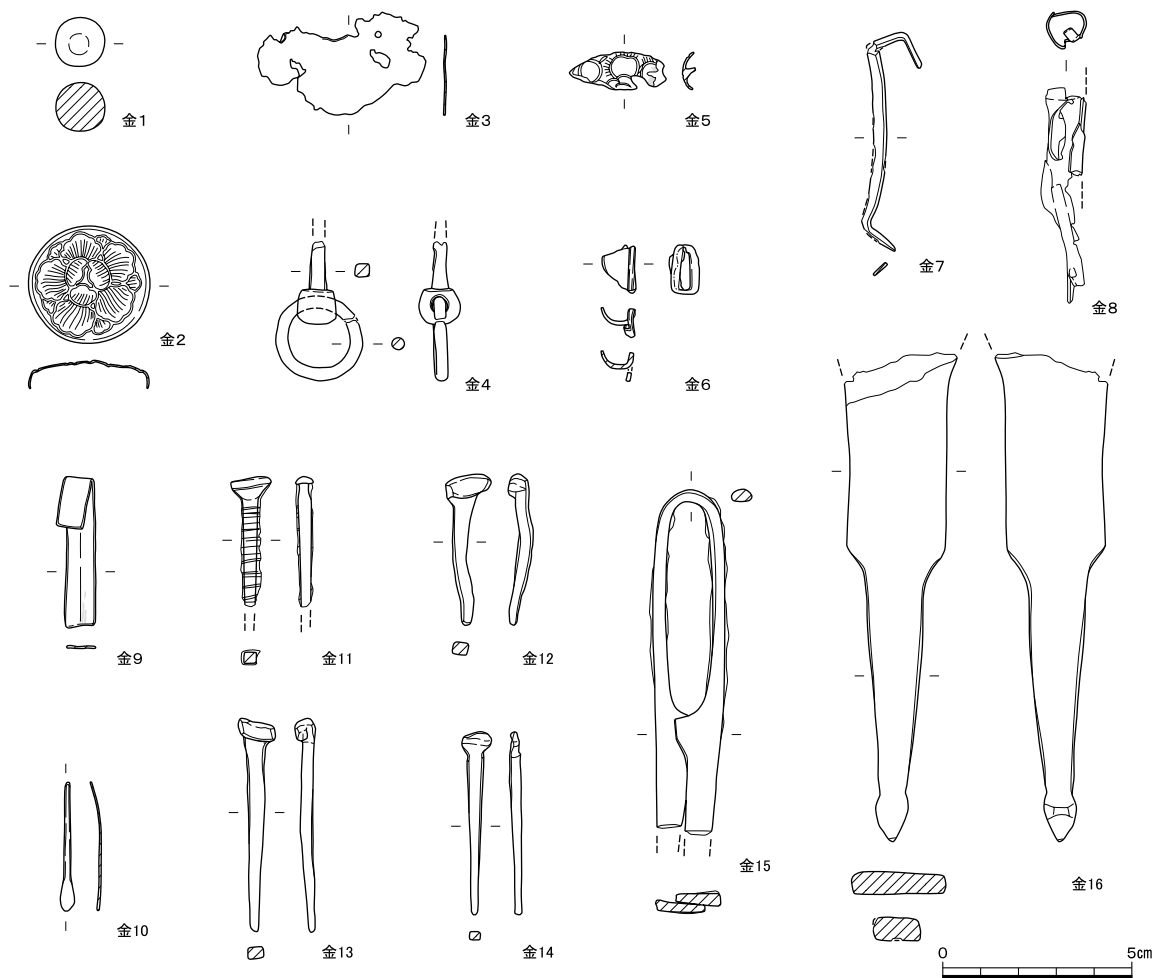


図13 金属製品実測図 (1 : 2)

ら出土した。金6は用途不明品。中央に長方形の穿孔があり、ひも状のものを通して使用すると考えられる。整地層2から出土した。金7は紐金具。第1面検出中に出土した。金8は筒状製品。据付穴56から出土した。金9は板状製品。鍍金痕跡がある。一端を折り曲げる。金10は小匙。いずれも整地層2から出土した。整地層2からは、小片のため図化できていないがキセルの一部（付章の表1-No.4）も出土している。

金11～16は鉄製品である。金11～14は鉄釘。金11の表面には木質が残る。いずれも土坑143から出土した。金15は鋏。金16は工具か。いずれも土坑270から出土した。

（6）鑄造・鍛冶関連遺物（図14、図版24）

鑄1～4は鑄造や鍛冶に関する遺物である。鑄1は銅滓。整地層2から出土した。鑄2は銅の地金の一部と考えられる。精錬した銅を溝状に掘った地面などに流したと想定される。面を持つ。土坑143から出土した。鑄3は鑄型の一部である。青銅が付着する。整地層2から出土した。鑄4は炉壁の一部と考えられる。内面に凸部が見られる。鉄が付着する。土坑143から出土した。鑄5は椀型滓である。重量は約400 gある。土坑143から出土した。⁴⁾

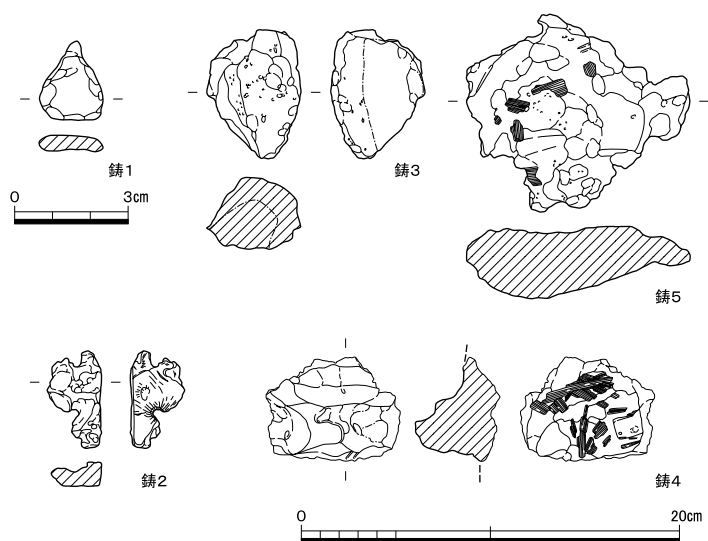


図14 鑄造・鍛冶関係遺物実測図（1：4、鑄1のみ1：2）

その他、石室128・土取土坑186から埴塙が出土している。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

- 2) 同志社大学構内調査（徳照館地点）報告（『同志社大学徳照館地点・新島会館地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1990年）の遺物6点の実見の機会を得た。その内3点は土師質である。いずれも胎土に礫を含む。部分的に二次被熱を受け須恵質となっていることを確認した。これらの点から、本調査出土の個体についても土師質で作られ二次被熱を受け須恵質になったと考えられる。形状は酷似しており、『鑄造遺跡研究資料2017』p 37に掲載されている『御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書』の「ル壺」に相当すると考えられる。
- 3) 分析は龍谷大学の北野氏・山田氏に依頼し、詳細は付章にまとめて記載する。
- 4) 鑄造・鍛冶関係の遺物の見解については五十川伸矢氏にご教授いただいた。

5. ま と め

今回の調査では、調査地の室町時代前期から江戸時代中期の土地利用の様相を確認することができた。

(1) 室町時代の遺構

15世紀前半の様相

第3面では、15世紀前半の敷地を区画すると想定される東西方向の溝271を検出した。室町殿に関連する遺構と仮定すれば、出土した遺物の年代から足利義教の相当期になる。また前述したとおり、史料によれば文明11年(1479)に室町殿の規模は縮小している。今回検出した溝271は、15世紀前半の遺構と考えられることから、室町殿の規模が縮小される以前の敷地の在り方を示す遺構といえよう。室町殿との直接的な関係はこの溝だけでは不明であるが、以前に行った調査地よりも南側で義教期の時期の遺構を新たに検出できた点は注目すべき成果である。

16世紀中頃の様相

第2面では、調査区の北半部で16世紀中頃の土取土坑群を検出した。調査区の中央北寄りの基盤層は砂礫層の上にシルト層が堆積しており、このシルト層を採取するために土取が行われ、掘削されたと考えられる。16世紀中頃に形成された整地層1は厚さ約0.4mと厚く、土取りも大規模にみられ、史料上でみれば天文18年(1549)に上京立売組が成立していること¹⁾などから、この一帯の土地利用の変化に伴って大規模造成が行われた可能性が考えられる。本調査地の北西側の調査(図5の調査11)では15世紀後葉を境に土地利用の様相が異なってくることが指摘されている。しかし今回の調査では15世紀中頃から16世紀前半までの遺物がほとんど出土しておらず、当該期の遺構がみられないことから16世紀中頃までは空閑地になっていた可能性も考えられる。

(2) 安土桃山時代から江戸時代の遺構

17世紀前半から後半の様相

調査区北東部で建物1を検出した。

建物1は、布掘地業55を施し、礎石は一部褐色シルトで固定されていることから壁立の建物と考えられる。また建物1内では2基が並列するカマド33・68を検出した。このカマド33・68の下では、底部が基盤層に達する土坑270を確認した。またカマドの西側では土坑37・150・151を検出した。いずれも同規模の土坑で埋土から備前産焼締陶器の大甕の口縁部の破片が出土しており、甕据付穴と考えられる。甕は壁際に沿って並んでいた。この建物は厚い壁を持つが内部にカマドを備え持つことから蔵ではなく、通常の居住空間とも考えにくい。また、カマドの下に基盤層まで掘り抜いた遺構(土坑270)を検出しており、湿気抜きのために掘られた土坑とも想定される。これらのことから、この建物は風呂のような施設を持つ建物である可能性も想定される。また今回の遺構配置だけでは想像の域を超えないが、後述する精錬・鑄造・鍛冶関係の遺物を確認していること

から、鑄造・鍛冶などの作業を行った施設である可能性も想定しておきたい。この建物1は、炭層や焼土層で覆われており、最終的には火災によって焼失したものと考えられる。焼失年代は、東壁炭層で出土した土器の年代から1620～1680年の間の火災が想定され、当該地周辺の火災では、延宝3年(1675)の火災に該当すると考えられる²⁾。建物1の南西側では、ごみ捨て穴と考えられる土坑143、南側では石室128を検出した。これらの遺構は宅地の奥に配置されることが多いので、これらの位置関係から調査区南部は宅地の奥側に該当すると考えられる。

また、廃棄土坑である土坑143の埋土からは椀型滓、鉄の融着した炉壁、銅の地金、石室128からは銅の付着した埴塼、土坑186からもおそらく銅と考えられるスラグが付着した埴塼、整地層2からは銅滓や銅の融着した鑄型が出土している。前述したとおり、調査地周辺の調査(図5の調査1・4・24)では鑄造関係の遺構や遺物を検出している。これらの遺構の存在は、上京における鑄造工人の様相を示すものとも考えられており、安土桃山時代以降、公家・禁裏御用達の金工集団である「青家」の存在も指摘できよう。今回出土した精錬・鑄造・鍛冶関係の遺物も付近で銅の精錬や鑄造、鉄の鍛冶がおこなわれた可能性が想定でき、上京での鑄造工人の存在を示す重要な成果のひとつといえよう³⁾。

18世紀の様相

調査区西端で検出した南北方向の石垣50は、埋土上層の土師器の年代や裏込め埋土から一重網目の染付椀が出土していることなどを勘案すると、18世紀頃に造られたと考えられる。拡張区1で北端を検出しており、全長約20mに復元できる。前述の元禄14年(1701)の「元禄十四年実測大絵図」によれば、当地は勸修寺家屋敷地にあたり、勸修寺家の屋敷地西辺がこの石垣と想定され、敷地境界と考えられる。

調査区の中央南寄りで検出した18世紀の井戸6からは、禁裏御用品の肥前産磁器の染付も出土しており公家屋敷であったことを証明する考古学的資料といえよう。

註

- 1) 京都市編『史料京都の歴史7 上京区』平凡社 1980年
- 2) 細谷理恵・浜中邦弘「延宝三年京都大火－日記史料に見るその状況－」『同志社大学歴史資料館館報13号』同志社大学歴史資料館 2009年
- 3) 松田度「中・近世上京の鑄造工人」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第4集 学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』同志社大学歴史資料館 2005年
浜中邦弘・岡田健吾「同志社構内出土の鑄造関連遺物について」『鑄造遺跡研究資料2017』鑄造遺跡研究会 2017年

付章 出土資料の自然科学分析

龍谷大学文学部歴史学科 北野信彦・山田卓司
公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 関 晃史

(1) はじめに

室町殿は足利義満によって永徳元年(1381)に完成した室町幕府の御所である。しかし、今回の分析対象とした試料が出土した遺構年代16世紀から17世紀には室町殿は焼失しており、調査地には存在しておらず、当該期の調査地を伝える文献や絵図はない。本報告では、対象試料を調査地の性格を考える上での一材料とすることを目的とし、以下に述べる分析調査によって得られた結果を記すこととする。

(2) 対象試料

対象試料としたのは金属製品8点、金属生産関連遺物5点、赤色顔料付着陶器1点、金箔瓦2点の計16点である(表1)。

(3) 分析方法

3-1 蛍光X線による無機元素定性分析(対象: No.1~16)

無機元素定性分析には、龍谷大学文学部歴史学科文化財科学室設置の蛍光X線分析装置((株)

表1 分析試料一覧

分析No.	(報告No.)	試料名	出土遺構	遺構年代
1	(金1)	弾丸	整地層2	16~17世紀中
2	(瓦13)	金箔瓦(軒丸瓦)	整地層2	16~17世紀中
3	(鑄1)	銅滓	整地層2	16~17世紀中
4	—	キセルか(火皿を欠く雁首か)	整地層2	16~17世紀中
5	(金10)	小匙	整地層2	16~17世紀中
6	(鑄3)	鑄型片	整地層2	16~17世紀中
7	(75)	埴塼	石室128下層	17世紀前
8	(金5)	目貫	石室128下層	17世紀前
9	(金2)	釘隠し	土取土坑186	17世紀前
10	(金3)	瓔珞(大)	据付穴56	17世紀前~中
11	—	瓔珞(小)	据付穴56	17世紀前~中
12	(鑄2)	銅塊	土坑143	17世紀前~中
13	(鑄4)	炉壁片	土坑143	17世紀前~中
14	(瓦22)	金箔瓦(道具瓦)	据付穴190	17世紀中
15	(金4)	引手金具	土坑151	17世紀中
16	(82)	赤色顔料付着施釉陶器	土坑197	17世紀

日立ハイテクサイエンス社製EA1000VX、(株)リガク社製Niton XL3t-700携帯型エネルギー分散型、(株)堀場製作所社製MESA-500型)を用いた。EA1000VXによる分析条件は分析結果と共に記す。携帯型Niton XL3t-700の分析条件は測定視野：直径8.0mmスポット、管球：対陰極Agターゲット、管電圧：15 kV～40kVの切替操作、分析設定時間：60秒、大気圧での分析である。MESA-500型による分析条件は分析時間：600秒、試料室内：真空、X線管電圧：15kV及び50kV、電流：240 μ A及び20 μ A、検出強度：200.0～250.0cpsである。

3-2 漆箔の拡大観察 (対象：No.2・14)

調査対象である金箔瓦2点における漆箔の表面状態は、まずデジタル顕微鏡((株)スカラ社製DG-3型)を用いて50倍の倍率で拡大観察した。引き続き、注意深く採取した漆箔小破片試料は、デジタルマイクロスコープ((株)ハイロックス社製VH-7000S型)により1,000倍から2,500倍の高倍率で細部の観察を実施し、それぞれ画像記録として保存した。

3-3 鉛同位体比分析 (対象：No.1)

近年の先行研究では、16世紀末から17世紀前期頃の遺跡出土の鉄砲の弾丸(鉛玉)の鉛同位体比測定を実施することで、国産のみならず、東南アジア交易を通じて輸入された鉛原材料が使用されたことがわかってきた。本調査では、このような研究状況に鑑み、本試料の鉛同位体比測定を(株)日鉄テクノロジー・文化財調査・研究室(兼)解析技術部分析技術室に委託して、表面電離型質量分析を実施した。分析方法は、まず採取試料である鉛サビ剥落小片に硝酸を加えて溶解したのち、直流電圧で電気分解を行い、鉛成分を陽極の白金電極板上に二酸化鉛として析出させた。これを硝酸と過酸化水素水で溶解させて鉛同位体比測定用の溶液とした。この溶液の200mlに、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に塗布して、質量分析装置内に導入した。分析装置は、(株)Finnigan社製MAT262である。加熱温度は1200℃、昇温時間は20分である。なお、標準鉛にはNBS-SRM-981を用いて規格化を行った。

(4) 分析結果と考察

4-1 蛍光X線による無機元素定性分析 (対象：No.1～16)

EA1000VXを用いた蛍光X線分析結果を図1～4 (No.1・3・7・12)に、XL3t-700携帯型蛍光X線分析装置による結果を表2 (No.4～6・8～11・13・15・16)に、MESA-500を用いた結果を図5・6 (No.2・14)に示し、概要について以下に述べる。

No.1はPb(鉛)からなり、鉄砲の弾丸と推定される鉛玉である。

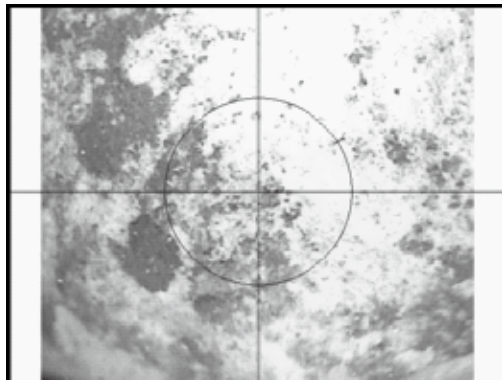
No.2・14は金箔瓦に用いられている金箔を分析し、いずれも顕著なAu(金)を検出した。その一方で極めて微量のAg(銀)も同時に検出された。ただし、Agは意識的に添加したかAu素材に本来含まれていたものかは不明である。

No.3～12・15はCu(銅)を主体とする試料である。No.5は、ほぼCuのみからなる銅製品であ

〔測定条件〕

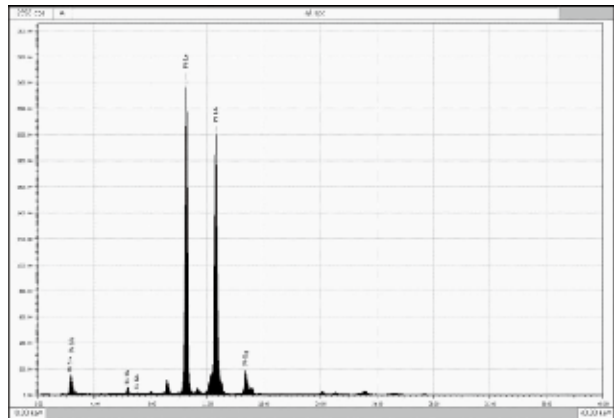
測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	100
有効時間(秒)	71
コリメータ	φ3.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	79
フィルタ	OFF
マイラー	OFF
コメント	鉛玉

〔試料像〕



視野:[X Y] 7.92 5.94(mm)

〔蛍光X線スペクトル〕



〔検出元素一覧〕

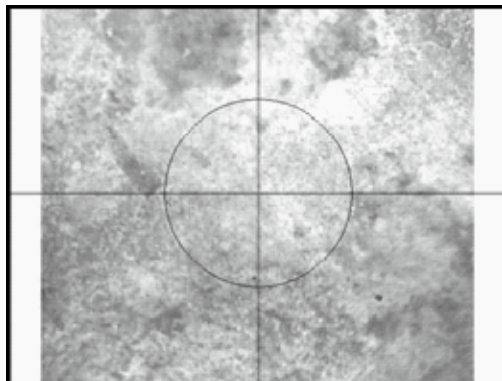
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	1219.321	6.21-6.59
82	Pb	鉛	Lα	55641.387	10.33-10.75

図1 No.1 蛍光X線分析結果

〔測定条件〕

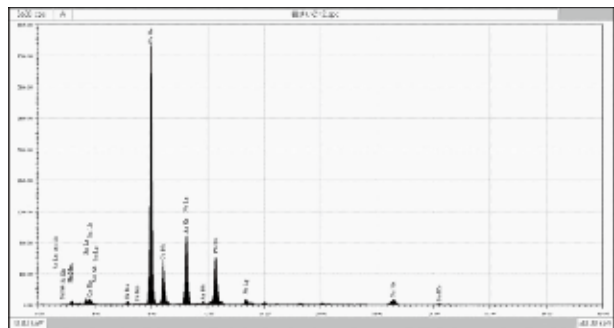
測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	100
有効時間(秒)	70
コリメータ	φ3.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	88
フィルタ	OFF
マイラー	ON
試料名	銅滓

〔試料像〕



視野:[X Y] 7.92 5.94(mm)

〔蛍光X線スペクトル〕



〔検出元素一覧〕

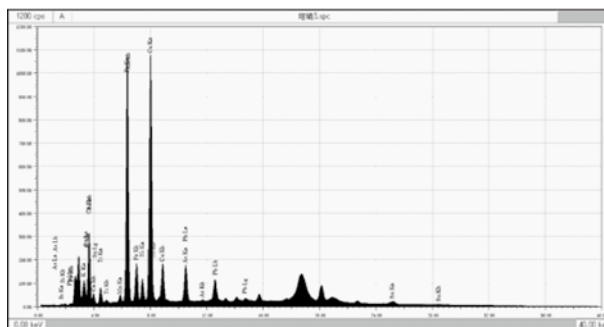
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
14	Si	ケイ素	Kα	103.435	1.59-1.89
20	Ca	カルシウム	Kα	1804.615	3.52-3.85
26	Fe	鉄	Kα	893.025	6.21-6.59
29	Cu	銅	Kα	66736.246	7.83-8.24
33	As	ヒ素	Kα	20225.229	10.30-10.75
50	Sn	スズ	Kα	2714.282	24.76-25.56
82	Pb	鉛	Lα	20040.112	10.33-10.75

図2 No.3 蛍光X線分析結果

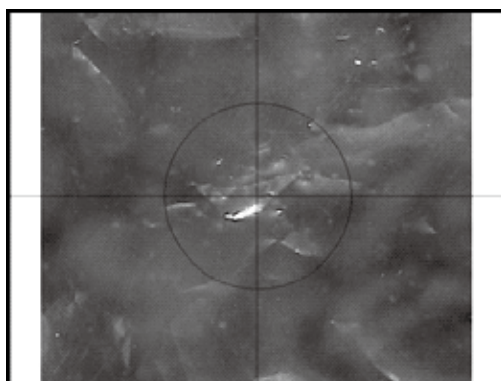
[測定条件]

測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	100
有効時間(秒)	72
コリメータ	φ3.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	796
フィルタ	OFF
マイラー	OFF
試料名	坩堝

[蛍光X線スペクトル]



[試料像]



視野: [X Y] 7.92 5.94(mm)

[検出元素一覧]

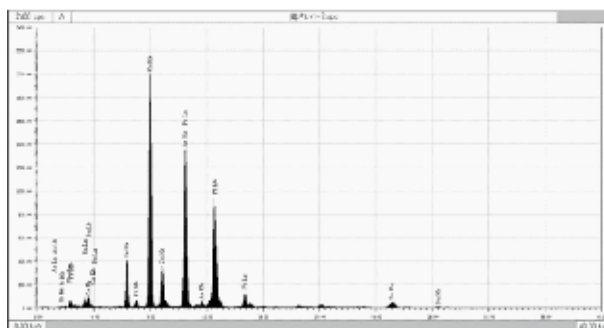
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
14	Si	ケイ素	K α	229.495	1.59-1.89
19	K	カリウム	K α	2470.208	3.15-3.47
20	Ca	カルシウム	K α	5633.763	3.52-3.85
22	Ti	チタン	K α	1630.679	4.33-4.68
25	Mn	マンガン	K α	1254.169	5.71-6.08
26	Fe	鉄	K α	20587.221	6.21-6.59
28	Ni	ニッケル	K α	2719.583	7.27-7.67
29	Cu	銅	K α	22142.053	7.83-8.24
33	As	ヒ素	K α	4511.581	10.30-10.75
50	Sn	スズ	K α	1299.272	24.76-25.56
82	Pb	鉛	L α	4417.409	10.33-10.75

図3 No.7 蛍光X線分析結果

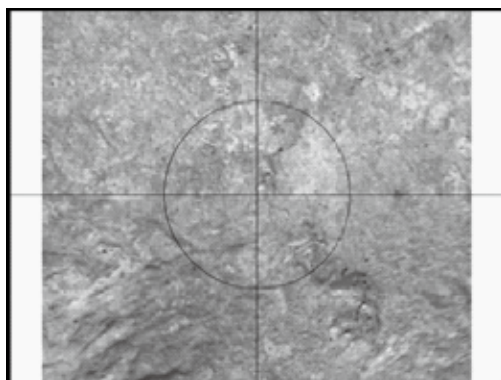
[測定条件]

測定装置	EA1000VX
測定時間(秒)	100
有効時間(秒)	70
コリメータ	φ3.0mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	103
フィルタ	OFF
マイラー	OFF
試料名	銅塊

[蛍光X線スペクトル]



[試料像]



視野: [X Y] 7.92 5.94(mm)

[検出元素一覧]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
14	Si	ケイ素	K α	208.569	1.59-1.89
20	Ca	カルシウム	K α	1888.122	3.52-3.85
26	Fe	鉄	K α	7852.171	6.21-6.59
29	Cu	銅	K α	40221.966	7.83-8.24
33	As	ヒ素	K α	31066.236	10.30-10.75
50	Sn	スズ	K α	2081.381	24.76-25.56
82	Pb	鉛	L α	30791.902	10.33-10.75

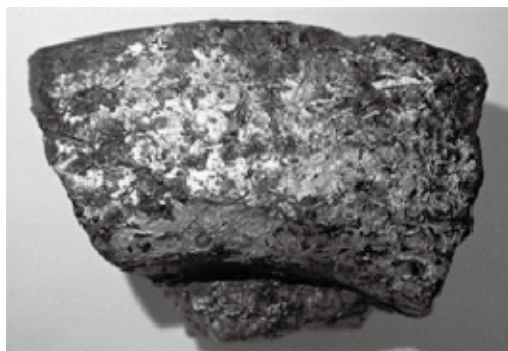
図4 No.12 蛍光X線分析結果

表 2 XL3t-700 携帯型蛍光 X 線分析装置による分析結果

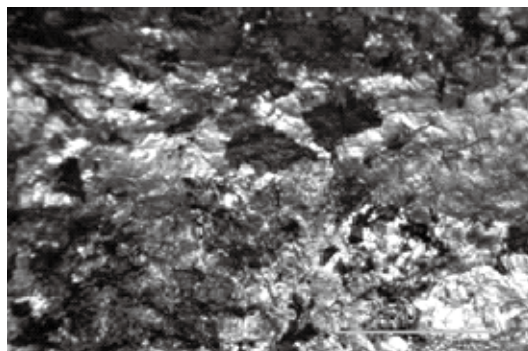
分析No.	(報告No.)	出土遺構	遺構年代	試料名	検出元素														備考	
					S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Ni	Cu	Zn	Ag	As	Sn	Pb	Hg		Au
4	—	整地層 2	16～17世紀中	キセルか、	8733	5072	4942	869		61.8K		3M	454.6K	475	6495	220	20.6K	398	真鍮製	
					9850	5005	5356	810		41.1K		3M	374.7K	305	4607	140	14.5K	230		60
5	(金10)	整地層 2	16～17世紀中	小匙	2116	8359	61.3K	1755		9248		203.1K		1137	807		1060		銅製	
					2066	3251	51.5K	451		2410		202.8K		1137	571		671			
6	(鑄3)	整地層 2	16～17世紀中	鑄型片	2758	16.8K	10.5K	4165	1955	58.8K	267	148.4K	242	296	185	11.6K	13.9K	1	67	
					3695	2878	10.2K	190		3848		1M		2668	9555	141	974	114	1092	
8	(金5)	石室128下層	17世紀前	目貫	9216	2514	6320			2401		2M		2758	12.7K	179	1259	176	357	金銅製
					2595	14.3K	12.2K	2010	2976	76.3K		2M		3211	13.8K	6798	2440	109	91	
				5178	3520	7818	298		6053		2M		4138	15.9K	255	1847	402	1435		
9	(金2)	土取土坑186	17世紀前	釘隠し	4646	3152	2925			2352	17.5K	3M		3596	7736	113	8975	243	ニッケルを含む銅製	
					4796	3102	8650	172		4160	17.7K	3M		3486	7803	82	9642	430		
10	(金3)	据付穴56	17世紀前～中	環珞(大)	1132	3051	2235	464		56.0K	6439	2M		3197	3653	196	2565	195		真鍮製
					3359	7123	13.3K	815		93.8K		2M	36.8K	2184	8608	2632	29.8K	227	326	
11	—	据付穴56	17世紀前～中	環珞(小)	3441	5540	6615	924		113.2K		2M	29.7K	2029	6907	2192	24.8K	81	283	真鍮製
					4149	5680	11.7K	580	1593	76.5K		2M	43.7K	2050	7295	2468	26.8K	80	304	
13	(鑄4)	土坑143	17世紀前～中	炉壁片	525	8917	6653	1797	1286	32.6K	64	104	108	24		30	6	3	1	鉄製品生産関連
					1175	5676	6898	866	1701	47.0K		1M		2136	4582	141		70	533	
15	(金4)	土坑151	17世紀中	引手金具	628	1503	3494	199	528	16.2K			252.7K	304	1041		10	42	55	金銅製か
					1328	7779	23.0K	1244	1028	42.2K		818.8K		1011	2967	21		343		
16	(82)	土坑197	17世紀	赤色顔料付着施釉陶器	4967	811	11.9K	325		906		26	70					5667		水銀朱によって赤色を呈する。

単位：K＝1000、M＝1000000

[試料像]



[漆箔の拡大観察]



[蛍光X線スペクトル]

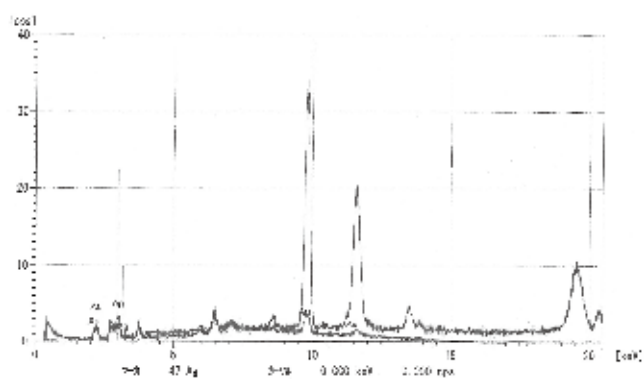
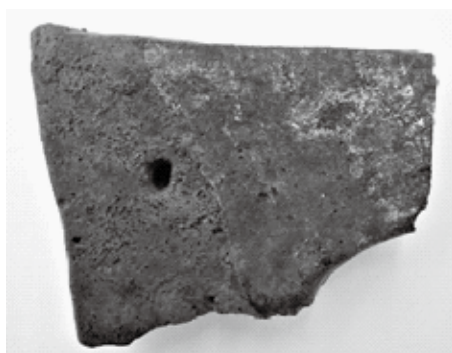
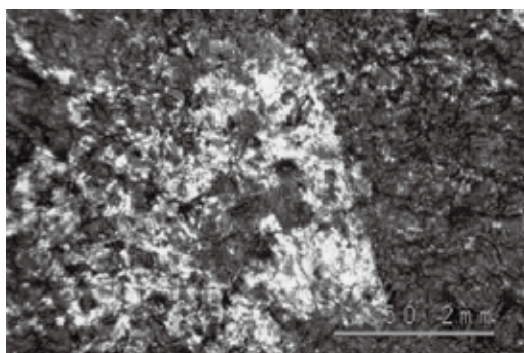


図5 No.2 蛍光X線分析結果

[試料像]



[漆箔の拡大観察]



[蛍光X線スペクトル]

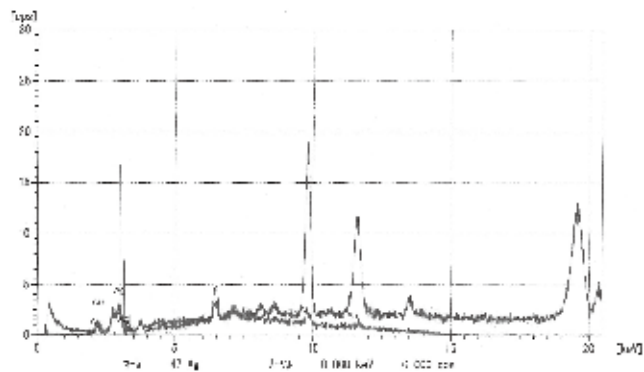


図6 No.14 蛍光X線分析結果

る。No.3・6・7・12には、PbとSn（スズ）が検出された。この4点のうちNo.3は銅の抽出に伴う不純物として考え、ここでは銅滓として評価する。No.12については青銅地金と評価し、No.6については、この鋳型を用いて製作された製品が青銅製であったものと推測する。No.4・10・11の3点はZn（亜鉛）とPbを含む真鍮製品である。No.8はAuとHg（水銀）を検出し、試料表面に金の残存を認め、アマルガム鍍金された金銅製品である。No.15はAu、Hgを共に検出しているが、検出強度は弱く、顕微鏡観察においても金が確認できないため、鍍金された可能性があるに留める。No.7・9はNi（ニッケル）を検出した試料でいずれも17世紀前期の遺構から出土している。Niは金属生産をする際の不純物として、滓などで検出されることはあるが、この時期の金属製品から強く検出される例はあまりない。ニッケルと銅の合金は銀に似た色合いを呈し、現在では「白銅」と呼ばれるが、この合金技術は明治時代以降の所産と言われている。以上の銅を主体とした11点の試料からは、いずれもAs（ヒ素）を検出しており、特にNo.8では強い検出がみられた。

No.13は胎土箇所の観察でスサの混入があり、融解箇所ではFe（鉄）の検出が強くみられたため、鉄製品の生産に関わる炉壁などの欠片と考えた。

No.16は施釉陶器の内面底部に赤色顔料が円形に遺存する試料である。赤色箇所ではCa（カルシウム）とHgを検出しており、赤色を呈する顔料は水銀朱と考え、陶器はパレットとして使用されたものと判断した。パレットの場合、Caは顔料の胡粉に由来する可能性があるが特定には至っていない。

上述した試料のうち、金属製品製作に伴う遺物やパレットなどは工房の存在を窺わせる試料であり、調査地またはその近辺の性格を物語る遺物といえよう。調査地周辺には既往調査において、室町時代後期から江戸時代末期にかけての工房跡や金属製品生産関連遺物が数多く確認されており、今回の試料もそれらに関連した遺物の可能性は高い。

4-2 漆箔の拡大観察（対象：No.2・14）

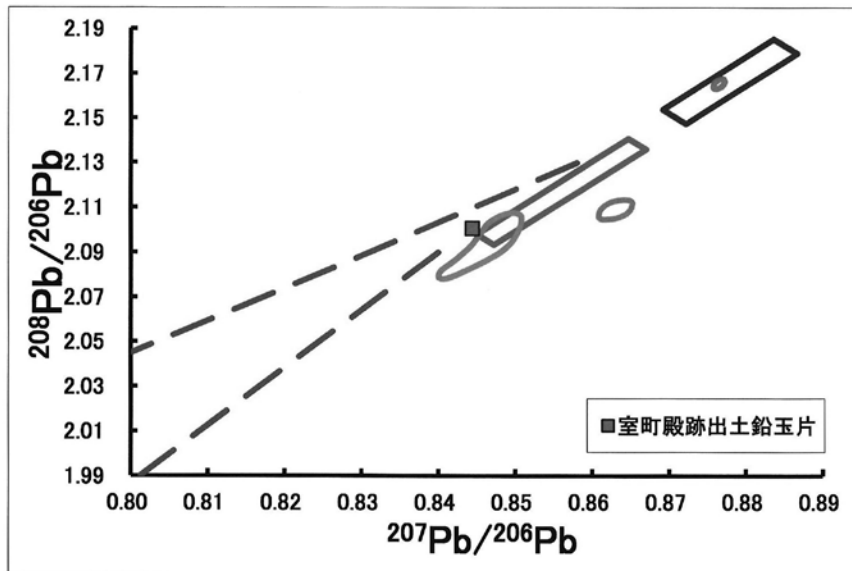
本調査で対象とした出土金箔瓦片の2試料（図5・6）は、いずれも箔足が明確に観察されるため、胎部に貼る際にパッチワーク状に切って貼り付けられたと理解した。また、接着材料である漆塗料は朱顔料を含む朱漆ではなく、拡大観察の状況からは生漆もしくは極めて微量の朱顔料を含む潤漆であると考えられる。

4-3 鉛同位体比分析（対象：No.1）

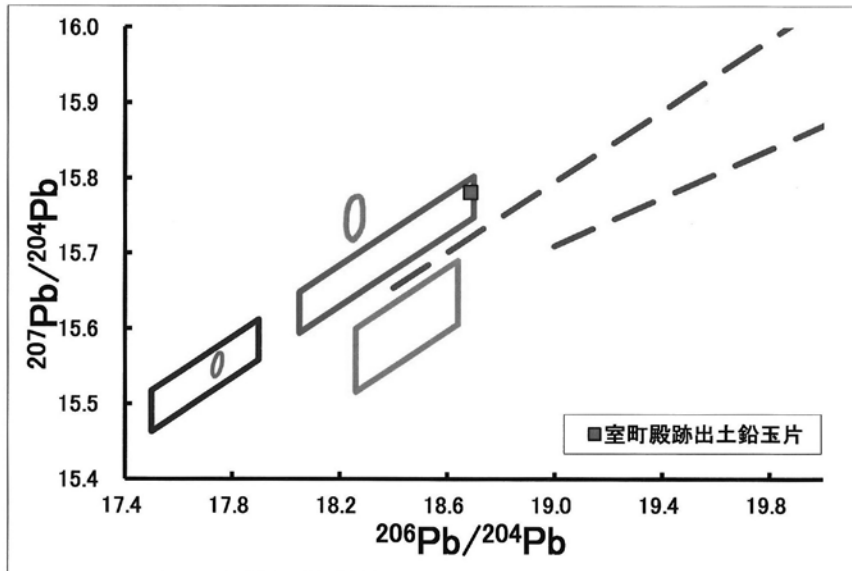
本調査で対象とした弾丸は、日本や朝鮮半島、東南アジアのタイ領域の鉛鉱山由来の鉛成分はなく、中国領域の鉛鉱山由来の鉛成分であるという結果を得た（表3、図7）。17世紀前期頃には、平戸や長崎を通じて、オランダ東インド会社や中国と活発な交易が行われていたことが知られている。輸入品目は多岐に及ぶが、その中に鉛原材料も組まれていたことは平戸や長崎の『オランダ商館長の日記』にも登場する。本試料もそのような鉛原材料が、南蛮交易や御朱印船交易を通じて日本国内に輸入され、鉄砲玉として加工された鉛玉が京都市中で出土したのであろう。

表3 №1 鉛同位体比測定結果

試料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
NBS-SRM-981	16.886	15.423	36.484	0.9134	2.1606
室町殿弾丸(№.1)	18.689	15.781	39.257	0.8444	2.1006
NBS-SRM-981	16.894	15.433	36.516	0.9135	2.1615
測定精度	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006



A式図



B式図

- : 中国前漢鏡の領域
- : 中国後漢・三国鏡の領域
- : 日本産鉛の領域
- : 朝鮮半島系遺物ライン
- : タイ領域

図7 №1 鉛同位体比とその他の鉛鉱山領域との比較

参考文献

- 相原 正「国産ニッケルと国産コバルトの生産と利用の展開」『明星大学研究紀要』明星大学 1987年
- 斎藤 囲「めっきの発展－めっきのルーツとめっき発展上の主なできごと－」『表面技術58巻,12号』一般社団法人表面技術協会 2007年
- 浜中邦弘・岡田健吾「同志社構内出土の鑄造関連遺物について」『鑄造遺跡研究資料』鑄造遺跡研究会 2017年
- 松井 度「中・近世上京の鑄造工人」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第4集 学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』同志社大学歴史資料館 2005年
- 北野信彦『桃山文化期漆工の研究』pp.352 雄山閣 2018年
- 日蘭学会編・日蘭交渉史研究会訳注『長崎オランダ商館日記1-10巻』雄松堂 1989～1999年
- 平戸市史編さん委員会『平戸市史 海外史料編Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ』平戸市 2004,2010,2012年

付表1 土器類一覧表

番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備 考
1	土師器	皿	溝271	7.0	1.6		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
2	土師器	皿	溝271	7.0	1.7		92	10YR8/2灰白色	
3	土師器	皿	溝271	7.2	2.0		100	10YR8/4浅黄橙色	
4	土師器	皿	溝271	7.8	2.0		75	7.5YR8/4浅黄橙色	
5	土師器	皿	溝271	7.8	2.0		87	10YR8/2灰白色	
6	土師器	皿	溝271	8.2	2.3		80	7.5YR8/4浅黄橙色	
7	土師器	皿	溝271	8.2	2.0		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
8	土師器	皿	溝271	8.8	2.3		25	10YR8/3浅黄橙色	
9	土師器	皿	溝271	8.8	1.9		40	10YR8/3浅黄橙色	
10	土師器	皿	溝271		(2.7)		小片	10YR8/3浅黄橙色	
11	土師器	皿	溝271	12.2	2.2		88	7.5YR8/3浅黄橙色	
12	土師器	皿	溝271	15.8	2.7		25	7.5YR8/4浅黄橙色	
13	土師器	皿	溝271	8.8	2.1		13	10YR7/4にぶい黄橙色	
14	土師器	皿	溝271	8.8	1.7		13	7.5YR7/6橙色	
15	土師器	皿	溝271	9.4	2.1		50	10YR7/3にぶい黄橙色	
16	土師器	皿	溝271	11.4	2.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
17	土師器	皿	溝271	12.0	2.7		20	7.5YR7/6橙色	
18	土師器	皿	溝271	8.0	1.7		66	10YR8/3浅黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り
19	土師器	皿	溝271	8.6	1.8		67	7.5YR8/4浅黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り
20	土師器	皿	溝271	7.6	2.8		50	10YR8/4浅黄橙色	ロクロ成形 底部糸切り
21	瓦器	火鉢	溝271	20.2	4.3	17.6	25	N4/0灰色	
22	瓦器	鍋	溝271	27.6	10.1		13	2.5Y8/1灰白色	
23	輸入陶器	盤	溝271				小片	10YR6/3にぶい黄橙色	釉:10Y6/2オリーブ灰色 華南地方
24	土師器	皿	土器溜184	8.2	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色	
25	土師器	皿	土器溜184	8.2	1.6		100	10YR8/2灰白色	
26	土師器	皿	土器溜184	8.4	1.9		95	10YR8/2灰白色	灯明皿
27	土師器	皿	土器溜184	8.6	1.9		95	10YR8/3浅黄橙色	
28	土師器	皿	土器溜184	8.7	1.7		95	10YR8/2灰白色	
29	土師器	皿	土器溜184	8.8	1.6		100	10YR8/2灰白色	灯明皿
30	土師器	皿	土器溜184	8.8	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
31	土師器	皿	土器溜184	8.9	1.7		95	10YR8/3浅黄橙色	
32	土師器	皿	土器溜184	9.8	1.8		100	2.5Y8/2灰白色	
33	土師器	皿	土器溜184	9.8	1.9		60	10YR8/3浅黄橙色	
34	土師器	皿	土器溜184	9.8	1.9		95	10YR8/2灰白色	
35	土師器	皿	土器溜184	9.9	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
36	土師器	皿	土器溜184	10.8	2.1		75	2.5Y8/2灰白色	
37	土師器	皿	土器溜184	11.0	2.0		80	10YR8/3浅黄橙色	
38	土師器	皿	土器溜184	11.2	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
39	土師器	皿	土器溜184	11.2	2.0		95	10YR8/4浅黄橙色	
40	土師器	皿	土器溜184	11.6	2.2		40	2.5Y7/2灰黄色	
41	土師器	皿	土器溜184	13.2	2.2		100	2.5Y8/3淡黄色	
42	土師器	皿	土器溜184	13.2	2.1		33	10YR8/3浅黄橙色	
43	土師器	皿	土器溜184	13.3	2.0		95	10YR8/3浅黄橙色	
44	土師器	皿	土器溜184	13.6	1.9		95	10YR8/2灰白色	
45	土師器	皿	土器溜184	13.6	2.0		40	10YR8/3浅黄橙色	

※ ()は残存数値

番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備 考
46	土師器	皿	土器溜184	13.7	1.8		80	10YR8/3浅黄橙色	
47	土師器	皿	土器溜184	13.8	2.0		95	10YR8/3浅黄橙色	
48	土師器	皿	土器溜184	13.8	2.0		88	2.5Y8/3淡黄色	
49	土師器	皿	土器溜184	13.8	2.2		88	10YR8/3浅黄橙色	
50	土師器	皿	土器溜184	13.9	2.1		40	10YR8/3浅黄橙色	
51	土師器	皿	土器溜184	14.0	2.1		95	10YR8/2灰白色	
52	土師器	皿	土器溜184	14.0	1.9		33	10YR8/2灰白色	
53	土師器	皿	土器溜184	14.8	2.3		60	10YR8/2灰白色	
54	土師器	皿	土器溜184	15.0	(2.2)		40	7.5YR8/3浅黄橙色	
55	土師器	皿	柱穴149	9.1	1.7		95	10YR8/2灰白色	
56	土師器	皿	柱穴149	10.8	2.1		95	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
57	土師器	皿	柱穴149	13.3	1.9		80	10YR8/3浅黄橙色	
58	土師器	皿	柱穴149	15.3	2.3		95	10YR8/2灰白色	灯明皿
59	土師器	皿	土坑270	9.5	1.8		25	7.5YR7/6橙色	
60	土師器	皿	土坑270	9.6	1.9		25	7.5YR7/6橙色	
61	土師器	皿	土坑270	10.4	2.0		25	7.5YR7/6橙色	
62	土師器	皿	土坑270	10.8	2.1		25	10YR8/4浅黄橙色	
63	土師器	皿	土坑270	11.6	2.0		33	10YR8/4浅黄橙色	
64	土師器	皿	土坑270	12.2	2.2		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
65	土師器	火鉢	土坑270	30.6	(3.9)		13	5YR6/6橙色	
66	土師器	鍋	土坑270	34.6	(11.2)		33	7.5YR7/3にぶい橙色	
67	焼締陶器	搦鉢	土坑270	30.5	12.4	12.0	25	2.5YR6/8橙色	片口
68	輸入磁器	皿	土坑270		(1.3)	6.1	10	N8/0灰白色	
69	輸入磁器	碗?	土坑270		(2.3)	3.1	25	N8/0灰白色	
70	土師器	皿	石室128	5.7	1.2		33	10YR2/1黒色	黒色化する
71	土師器	皿	石室128	10.6	2.2		80	7.5YR8/4浅黄橙色	黒色化 灯明皿
72	土師器	皿	石室128	10.9	2.1		100	10YR7/3にぶい黄橙色	内面黒色化 灯明皿 外面土付着(繊維痕あり) 煤付着
73	土師器	皿	石室128	10.9	2.1		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
74	土師器	皿	石室128	12.8	2.1		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
75	土師器	埴塙	石室128	7.5	2.6		25	2.5Y5/1黄灰色	埴塙 銅付着 同志社校内遺跡出土例と同種
76	土師器	羽釜	石室128	14.7	(11.1)		33	10YR7/2にぶい黄橙色	体部に土付着
77	施釉陶器	皿	石室128	11.0	2.1	6.4	33	10YR7/1灰白色	釉:5Y5/4オリーブ色
78	施釉陶器	皿	石室128	11.2	2.5	5.3	25	10YR7/2にぶい黄橙色	釉:5Y5/4オリーブ色
79	施釉陶器	碗	石室128	10.8	(4.4)		25	10YR8/3浅黄橙色	釉:7.5YR4/3褐色
80	施釉陶器	碗	石室128	7.4	4.3	4.7	50	10YR7/1灰白色	釉:7.5Y5/3灰オリーブ色
81	輸入磁器	碗	整地層2	17.6	(7.6)		13	5Y8/1灰白色	釉:7.5Y5/3灰オリーブ色 人形手
82	施釉陶器	皿	土坑197		(1.7)	5.1	底部100	10YR8/4浅黄橙色	釉:2.5Y6/2灰黄色 見込みに朱付着
83	土師器	皿	土取土坑186	10.4	1.9		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
84	土師器	皿	土取土坑186	10.9	2.1		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
85	土師器	皿	土取土坑186	11.1	2.1		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
86	土師器	皿	土取土坑186	11.7	(2.0)		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
87	土師器	皿	土取土坑186	12.1	(2.0)		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
88	施釉陶器	皿	土取土坑186	10.5	2.2	5.6	80	2.5Y8/1灰白色	釉:5Y6/4オリーブ黄色

※ ()は残存数値

番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備 考
89	施釉陶器	皿	土取土坑186	11.0	2.2	6.0	33	5Y7/1灰白色	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色
90	施釉陶器	皿	土取土坑186	10.4	1.7	6.0	75	10YR8/3浅黄橙色	釉:7.5Y6/3オリーブ黄色
91	施釉陶器	蓋	土取土坑186	3.3	4.0		25	10YR7/2にぶい黄橙色	釉:5Y7/6黄色
92	輸入磁器	椀	土取土坑186	11.5	(4.3)		13	N8/0灰白色	釉:N8/0灰白色
93	施釉陶器	銅鑼鉢	カマド33	26.4	6.6	20.5	33	2.5Y8/2灰白色	釉:2.5Y8/2灰白色(長石釉) 志野
94	土師器	皿	土坑37	10.0	1.9		20	7.5YR7/6橙色	灯明皿
95	土師器	皿	土坑37	10.0	1.9		33	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
96	施釉陶器	向付	土坑37		5.2		小片	N7/0灰白色	釉:10YR8/1灰白色、 10YR3/1黒褐色 織部 二次被熱
97	焼締陶器	鉢	土坑37	15.4	(7.8)		33	10YR8/1灰白色	釉:7.5YR3/1黒褐色
98	焼締陶器	甕	土坑37				小片	10YR3/2黒褐色	備前
99	焼締陶器	甕	土坑37				小片	5YR4/2灰褐色	備前
100	土師器	皿	据付穴56	10.5	(2.4)		20	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
101	土師器	皿	据付穴56	13.9	(2.1)		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
102	土師器	皿	土坑143	5.3	1.3		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
103	土師器	皿	土坑143	5.3	1.3		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
104	土師器	皿	土坑143	5.6	1.0		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
105	土師器	皿	土坑143	5.9	1.2		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
106	土師器	皿	土坑143	6.0	1.3		100	10YR7/4にぶい黄橙色	灯明皿
107	土師器	皿	土坑143	6.0	1.1		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
108	土師器	皿	土坑143	6.6	1.3		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
109	土師器	皿	土坑143	6.9	1.4		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
110	土師器	皿	土坑143	7.3	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
111	土師器	皿	土坑143	7.4	1.5		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
112	土師器	皿	土坑143	10.1	2.1		50	10YR7/4にぶい黄橙色	灯明皿
113	土師器	皿	土坑143	10.1	2.1		33	10YR2/1黒色	黒色化
114	土師器	皿	土坑143	10.1	2.0		50	7.5YR7/4にぶい橙色	
115	土師器	皿	土坑143	10.2	2.1		100	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
116	土師器	皿	土坑143	10.3	2.2		100	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
117	土師器	皿	土坑143	10.8	2.1		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
118	土師器	皿	土坑143	11.0	2.1		67	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
119	土師器	皿	土坑143	11.0	2.0		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
120	土師器	皿	土坑143	11.0	2.1		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
121	土師器	皿	土坑143	11.0	2.1		33	10YR7/3にぶい黄橙色	
122	土師器	皿	土坑143	11.0	2.1		100	7.5YR8/4浅黄橙色	灯明皿
123	土師器	皿	土坑143	11.0	2.0		33	10YR7/4にぶい黄橙色	
124	土師器	皿	土坑143	11.1	2.2		13	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
125	土師器	皿	土坑143	11.1	2.1		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
126	土師器	皿	土坑143	11.2	2.3		17	10YR7/3にぶい黄橙色	灯明皿
127	土師器	皿	土坑143	11.2	2.3		100	10YR7/3にぶい黄橙色	
128	土師器	皿	土坑143	12.2	2.0		60	10YR7/2にぶい黄橙色	
129	土師器	皿	土坑143	12.2	1.9		50	10YR8/4浅黄橙色	
130	土師器	皿	土坑143	12.4	2.1		17	7.5YR7/4にぶい橙色	
131	土師器	皿	土坑143	12.9	2.1		33	10YR7/4にぶい黄橙色	
132	土師器	鍋	土坑143	30.8	(8.7)		20	10YR8/2灰白色	

※ ()は残存数値

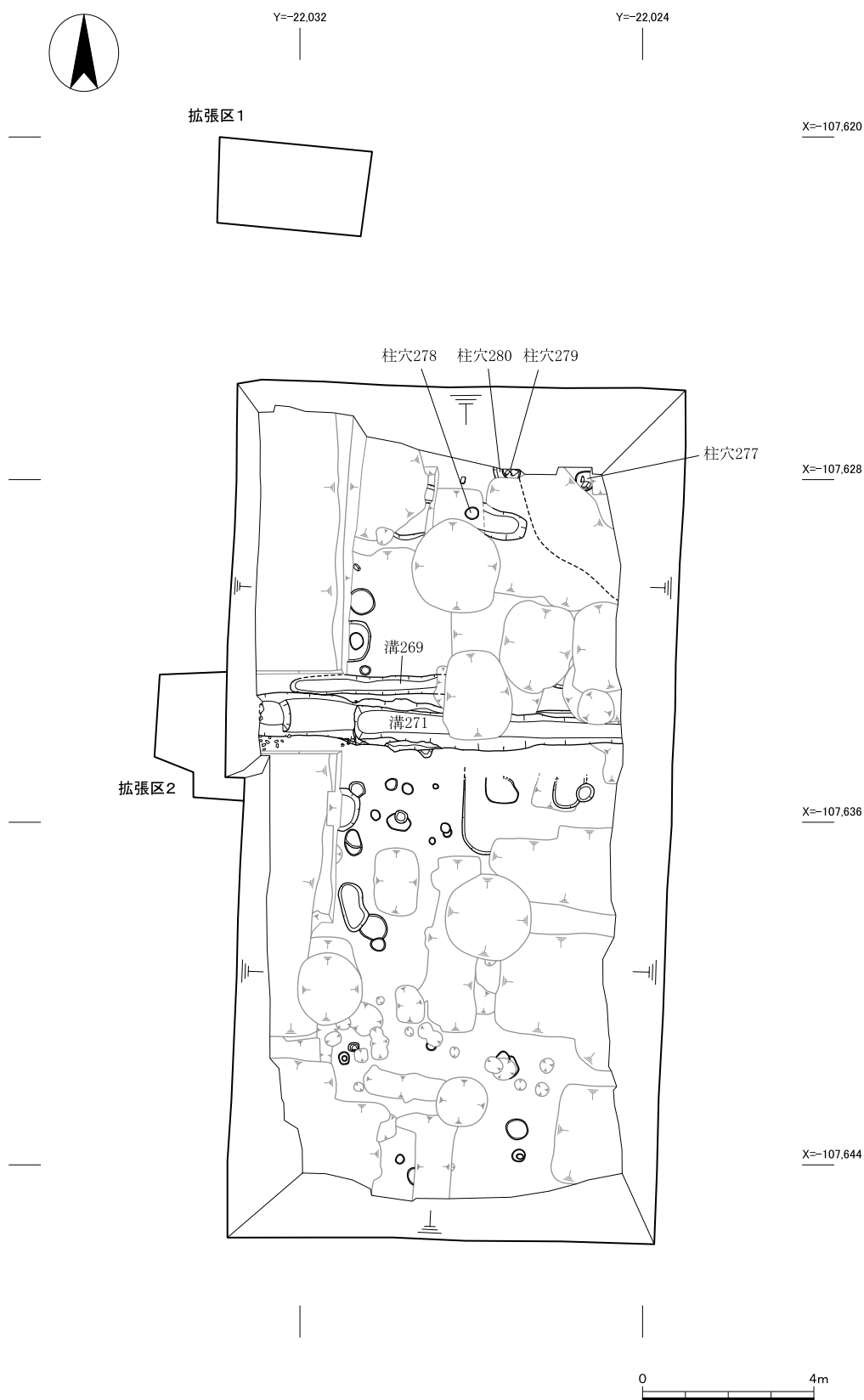
番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備 考
133	瓦器	火鉢	土坑143	33.0	11.0		25	N2/0黒色、 2.5Y8/1灰白色	体部に穿孔あり
134	施釉陶器	菊皿	土坑143	12.5	2.5	7.9	91	2.5Y8/1灰白色	釉:2.5Y8/2灰白色(長石釉) 美濃
135	施釉陶器	皿	土坑143	9.0	2.5	4.2	80	5Y8/1灰白色	5Y6/3オリーブ黄色
136	焼締陶器	播鉢	土坑143	29.0	12.3		30	5YR4/6赤褐色	櫛目8本1単位
137	土師器	皿	土器溜147	5.3	1.5		50	10YR7/4にぶい黄橙色	
138	土師器	皿	土器溜147	5.9	1.3		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
139	土師器	皿	土器溜147	6.3	1.4		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
140	土師器	皿	土器溜147	10.1	(2.2)		50	10YR7/4にぶい黄橙色	
141	土師器	皿	土器溜147	10.8	2.2		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
142	土師器	皿	土器溜147	10.5	2.1		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
143	土師器	皿	土器溜147	10.8	2.3		80	7.5YR7/4にぶい橙色	
144	土師器	皿	土器溜147	10.8	2.4		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
145	土師器	皿	土器溜147	10.9	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
146	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.2		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
147	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.3		60	7.5YR7/6橙色	
148	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.3		50	7.5YR7/4にぶい橙色	
149	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.2		33	7.5YR7/4にぶい橙色	
150	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.2		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
151	土師器	皿	土器溜147	11.0	2.4		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
152	土師器	皿	土器溜147	11.1	2.3		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
153	土師器	皿	土器溜147	11.1	2.2		40	7.5YR7/4にぶい橙色	
154	土師器	皿	土器溜147	11.2	2.2		67	7.5YR7/4にぶい橙色	
155	土師器	皿	土器溜147	11.2	(2.2)		40	7.5YR8/4浅黄橙色	
156	土師器	皿	土器溜147	11.2	2.4		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
157	土師器	皿	土器溜147	11.2	2.2		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
158	土師器	皿	土器溜147	11.3	2.0		95	7.5YR7/4にぶい橙色	
159	土師器	皿	土器溜147	11.4	2.0		90	7.5YR7/4にぶい橙色	
160	土師器	皿	土器溜147	11.4	2.6		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
161	土師器	皿	土器溜147	11.5	2.2		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
162	土師器	皿	土器溜147	11.5	2.2		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
163	施釉陶器	皿	土器溜147	11.6	2.4	6.1	50	2.5Y8/2灰白色	釉:2.5Y8/3淡黄色 美濃、見込みにトチン痕跡
164	施釉陶器	皿	土器溜147	13.2	3.7	3.8	33	10YR6/4にぶい黄橙色	釉:5Y7/2灰白色 唐津、見込みに目あと
165	土師器	皿	炭層(東壁27層)	10.4	2.1		50	7.5YR7/6橙色	灯明皿
166	土師器	皿	炭層(東壁27層)	17.4	2.5		25	10YR7/3にぶい黄橙色	灯明皿
167	輸入磁器	椀	炭層(東壁27層)	12.8	(5.0)		13	7.5GY8/1明緑灰色	
168	土師器	皿	石垣50埋土下層	5.1	1.2		33	10YR7/3にぶい黄橙色	
169	土師器	皿	石垣50埋土下層	10.9	2.1		13	7.5YR7/4にぶい橙色	
170	土師器	皿	石垣50埋土下層	13.0	(2.2)		17	10YR7/3にぶい黄橙色	
171	土師器	小壺	石垣50埋土下層	2.0	2.5		50	10YR7/2にぶい黄橙色	
172	施釉陶器	皿	石垣50埋土下層	11.4	2.3	7.2	25	2.5Y8/2灰白色	釉:5Y7/2灰白色 高台内・見込みにトチン痕跡
173	施釉陶器	皿	石垣50埋土下層	11.1	2.3	6.2	33	2.5Y8/2灰白色	釉:2.5Y8/2灰白色 高台内・見込みにトチン痕跡

※ ()は残存数値

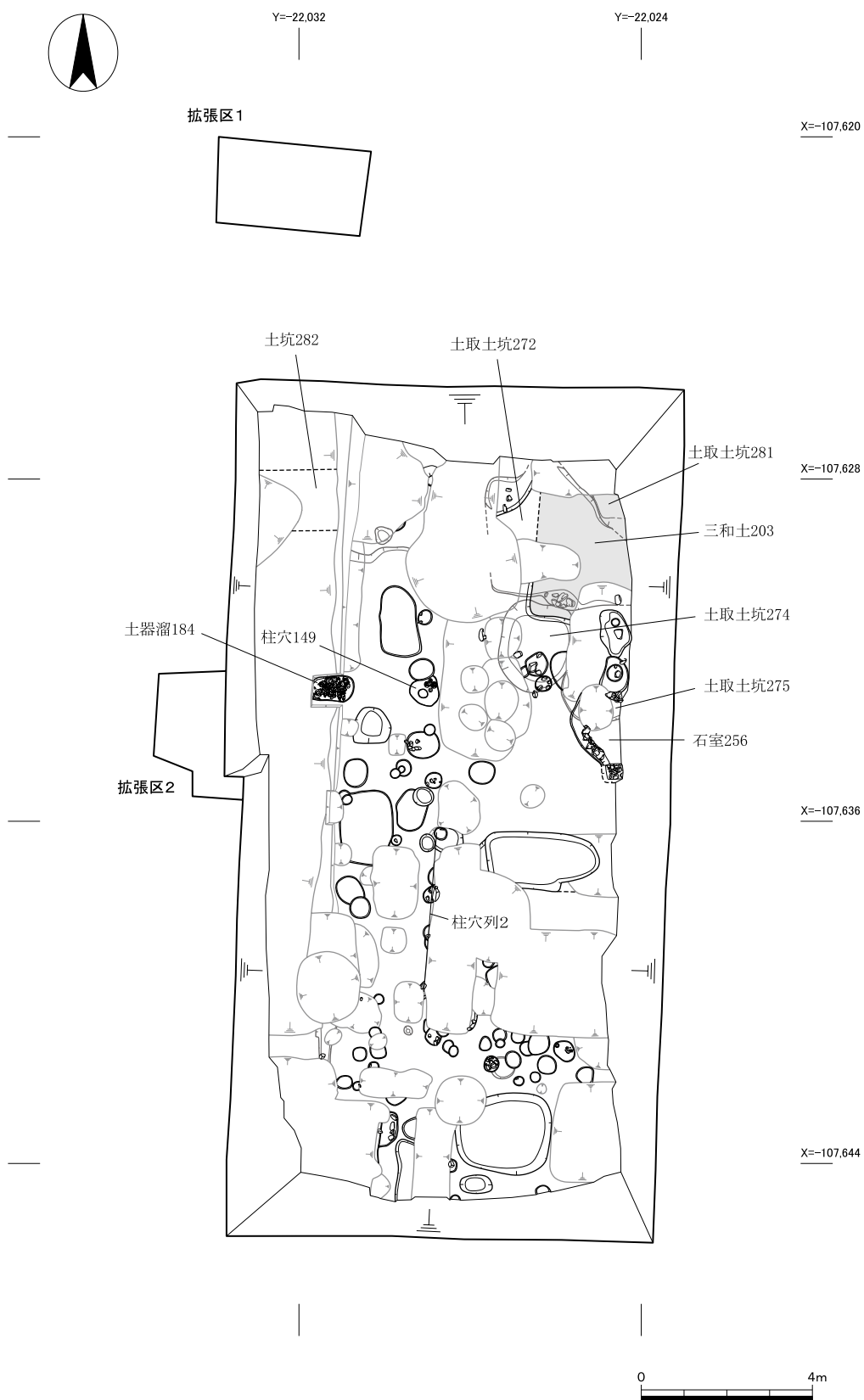
番号	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備 考
174	施釉陶器	碗	石垣50埋土下層		(4.0)	5.5	50	2.5Y8/3淡黄色	釉:7.5Y7/1灰白色
175	土師器	皿	石垣50埋土上層	6.0	1.3		75	10YR7/3にぶい黄橙色	
176	土師器	皿	石垣50埋土上層	9.7	2.1		95	10YR7/3にぶい黄橙色	
177	土師器	皿	石垣50埋土上層	10.7	2.0		100	10YR7/4にぶい黄橙色	灯明皿
178	土師器	皿	石垣50埋土上層	11.9	2.1		100	10YR7/3にぶい黄橙色	灯明皿
179	土師器	皿	石垣50埋土上層	11.9	2.1		50	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
180	施釉陶器	碗	石垣50埋土上層		(5.2)	5.1	40	7.5YR7/6橙色	2.5Y8/1灰白色
181	施釉陶器	碗	石垣50埋土上層		(5.9)	4.5	40	2.5Y7/3浅黄色	7.5YR3/5暗褐色
182	染付	皿	石垣50埋土下層		(2.1)	4.6	40	N8/0灰白色	
183	染付	碗	石垣50埋土上層		(2.6)	3.9	50	N8/0灰白色	
184	染付	碗	石垣50埋土上層		(1.7)	4.6	40	N8/0灰白色	
185	染付	碗	石垣50埋土上層		(3.5)	4.7	33	N8/0灰白色	
186	染付	碗?	井戸6					N9/0白色	釉:うすい明緑色 禁裏御用品 十六弁菊文
187	染付	碗	井戸6	16.0	(3.4)		20	N9/0白色	釉:透明 禁裏御用品 十六弁菊文に鳳凰
188	染付	碗	重機掘削	10.0	(1.4)		17	N9/0白色	禁裏御用品 十六弁菊文

※ ()は残存数値

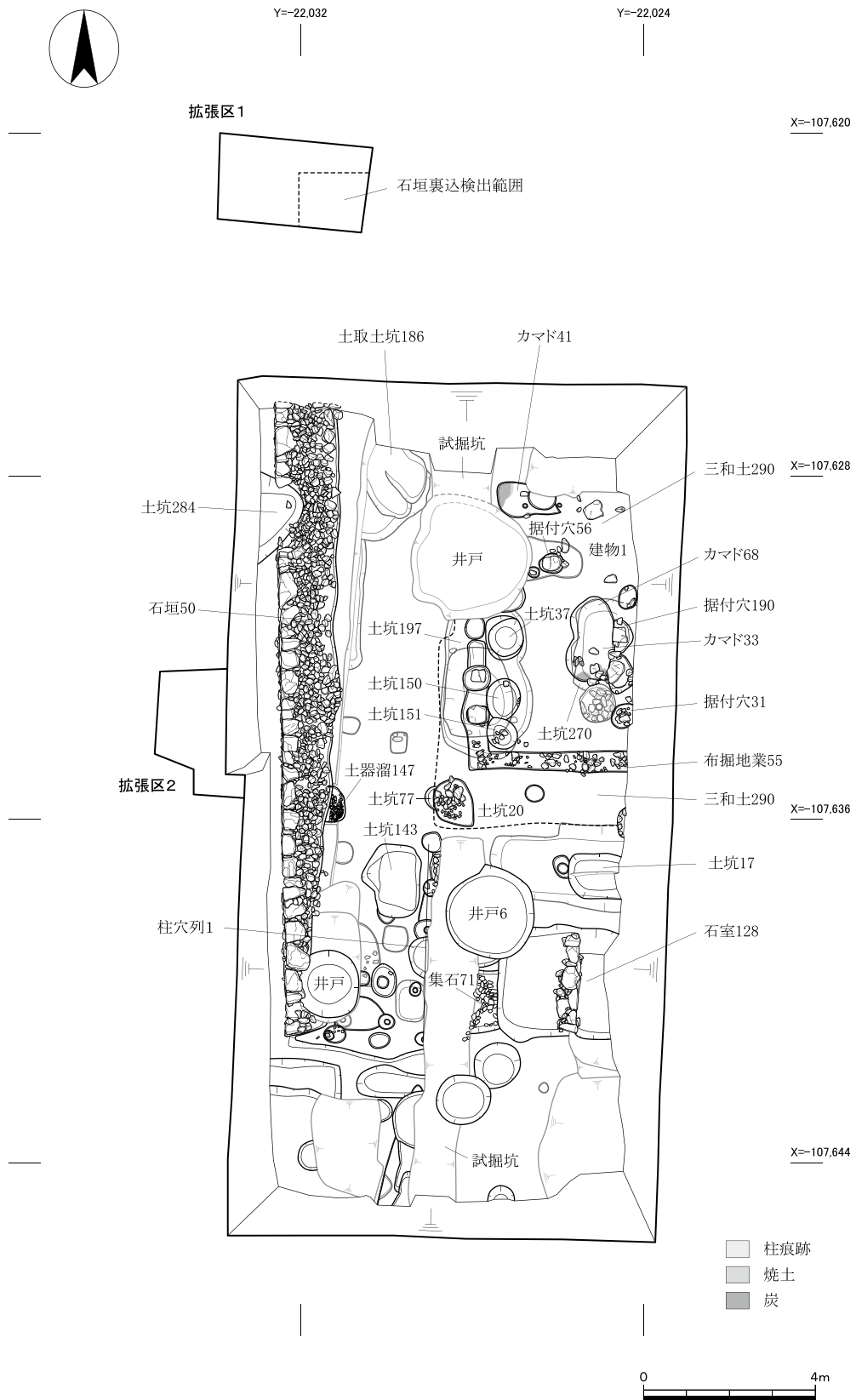
図 版



第3面遺構平面図（1：150）

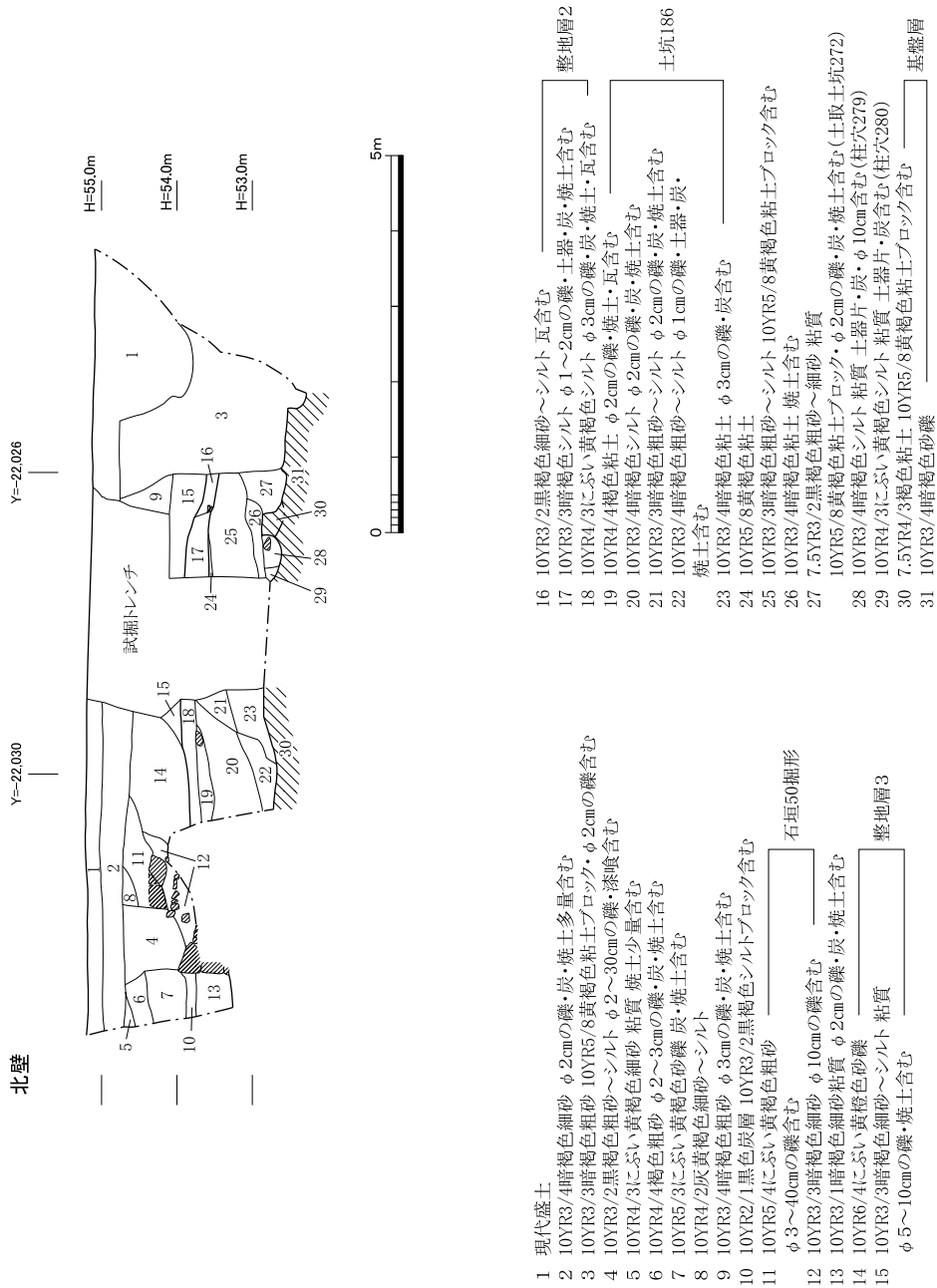


第2面遺構平面図（1：150）



第1面遺構平面図 (1 : 150)

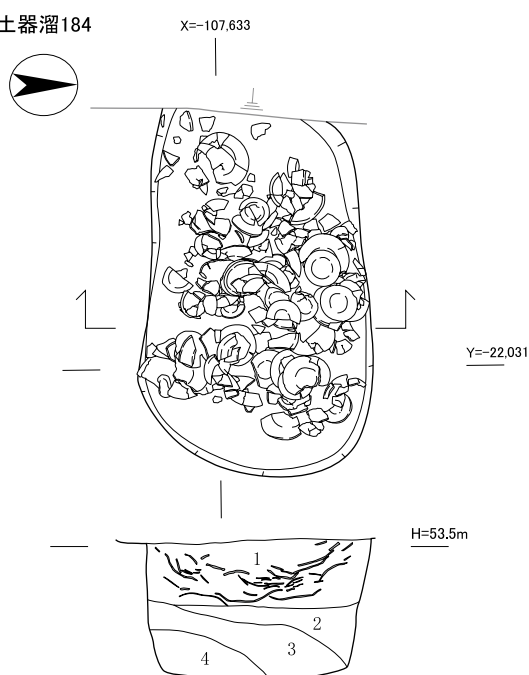
調査区北壁断面図（1：100）



$x = -107,644$ 

- [illegible]

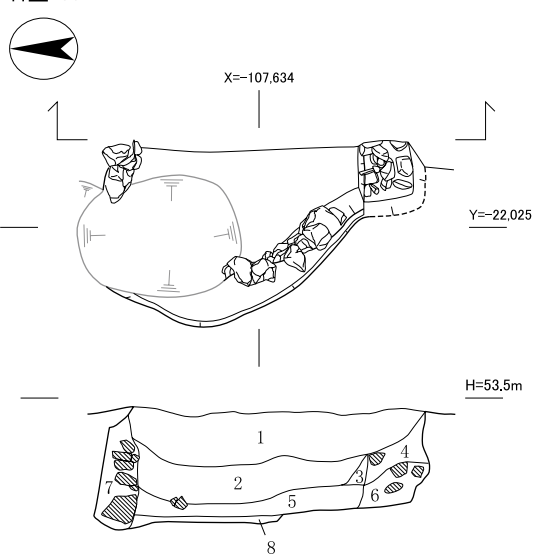
土器溜184



- 1 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト 粘質 締まる 土器多量に含む
- 2 10YR4/1褐灰色細砂～シルト φ1cmの礫・土器片含む
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～細砂 粘質 焼土含む
- 4 10YR4/4褐色細砂～シルト 粘質 φ1cmの礫・土器片含む

0 50cm

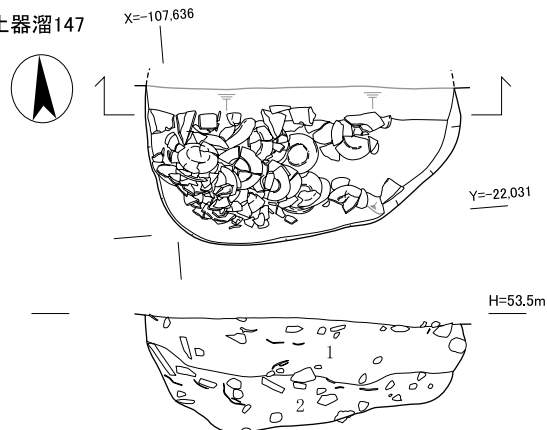
石室256



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～シルト
10YR5/8黄褐色粘土ブロック・φ2cmの礫・炭・焼土含む
- 2 10YR4/6褐色粗砂 粘質
10YR5/8黄褐色粘土ブロック・炭・焼土多量含む
- 3 10YR3/3暗褐色粘土 焼土含む
- 4 10YR4/4褐色粗砂～シルト 焼土含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 粘質
φ2cmの礫・炭・焼土含む
- 6 10YR3/4暗褐色粗砂 焼土含む
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 粘質
- 8 10YR3/3にぶい暗褐色粘土 (床構築土)

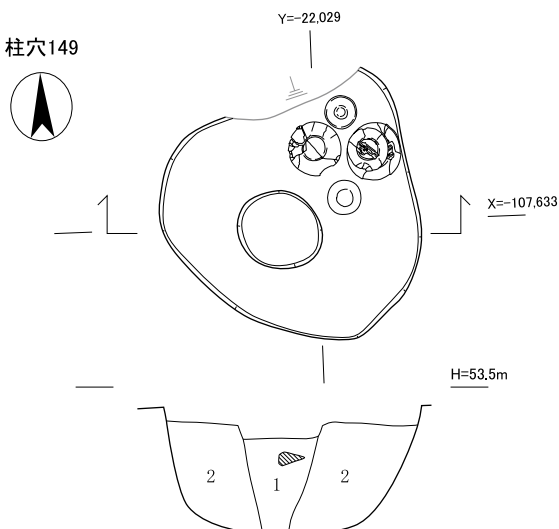
0 1m

土器溜147



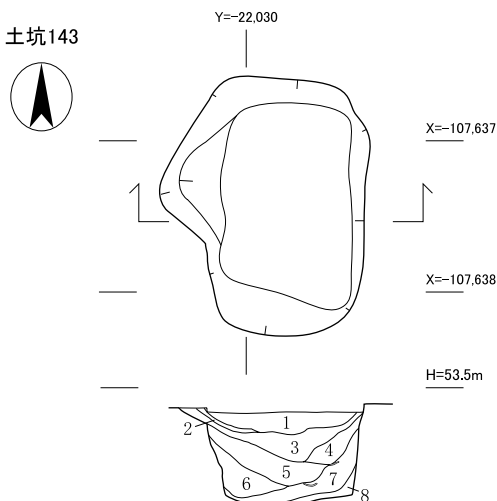
- 1 10YR3/2黒褐色粗砂～細砂 φ2cmの礫・土器・炭・焼土含む(埋土上層)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘土 粗砂混
φ3cmの礫・炭・焼土・土器多量含む(埋土下層)

柱穴149

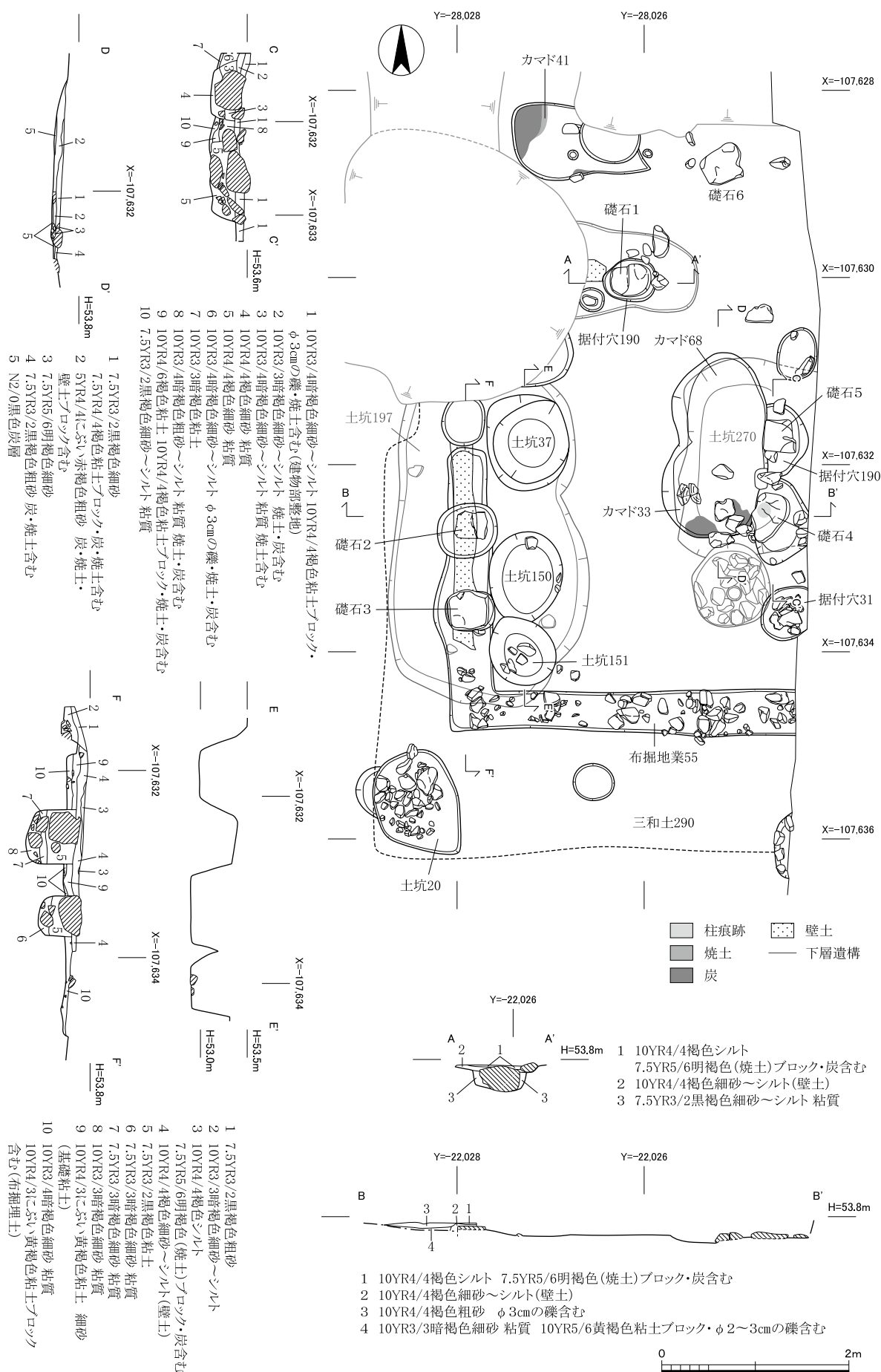


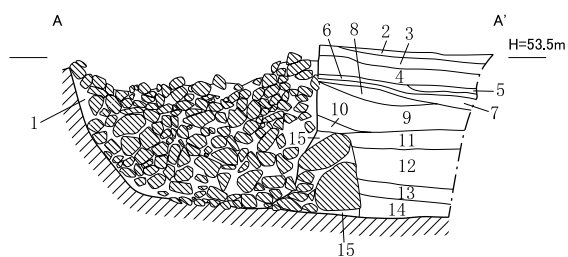
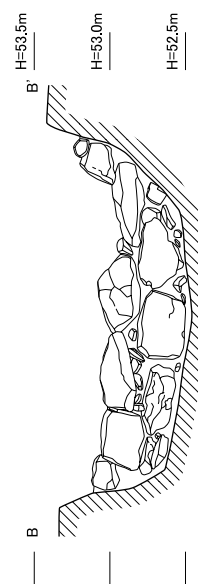
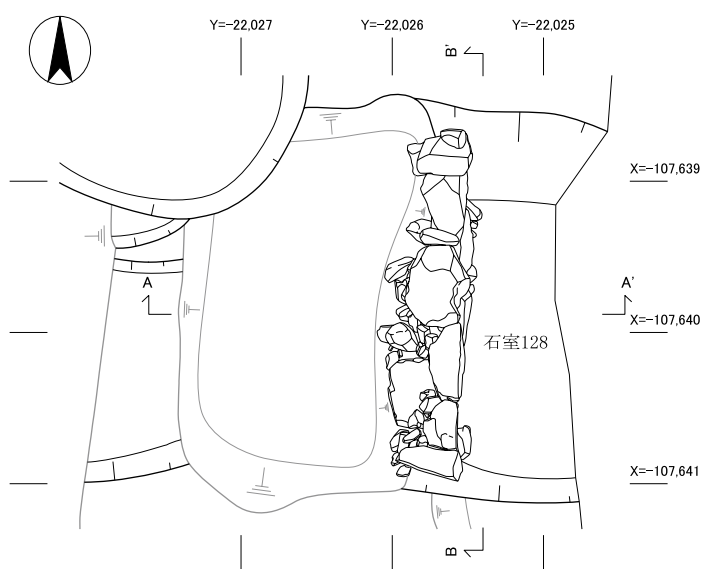
- 1 10YR3/3暗褐色粘土 φ3cmの礫・炭・焼土含む
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～シルト φ2～3cmの礫・炭・焼土含む

土坑143



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～シルト 粘質 炭・焼土含む
- 2 10YR2/1黒色シルト 炭層
- 3 10YR3/3暗褐色粗砂～シルト 粘質 炭含む
- 4 10YR4/4褐色シルト 粘質 炭多量に含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～シルト 粘質 φ4cmの礫・炭層含む
- 6 10YR3/3暗褐色シルト φ3cmの礫多量に含む
- 7 10YR3/4暗褐色粗砂～シルト 粘質 10YR4/4褐色粘土ブロック・炭層含む
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色粘土

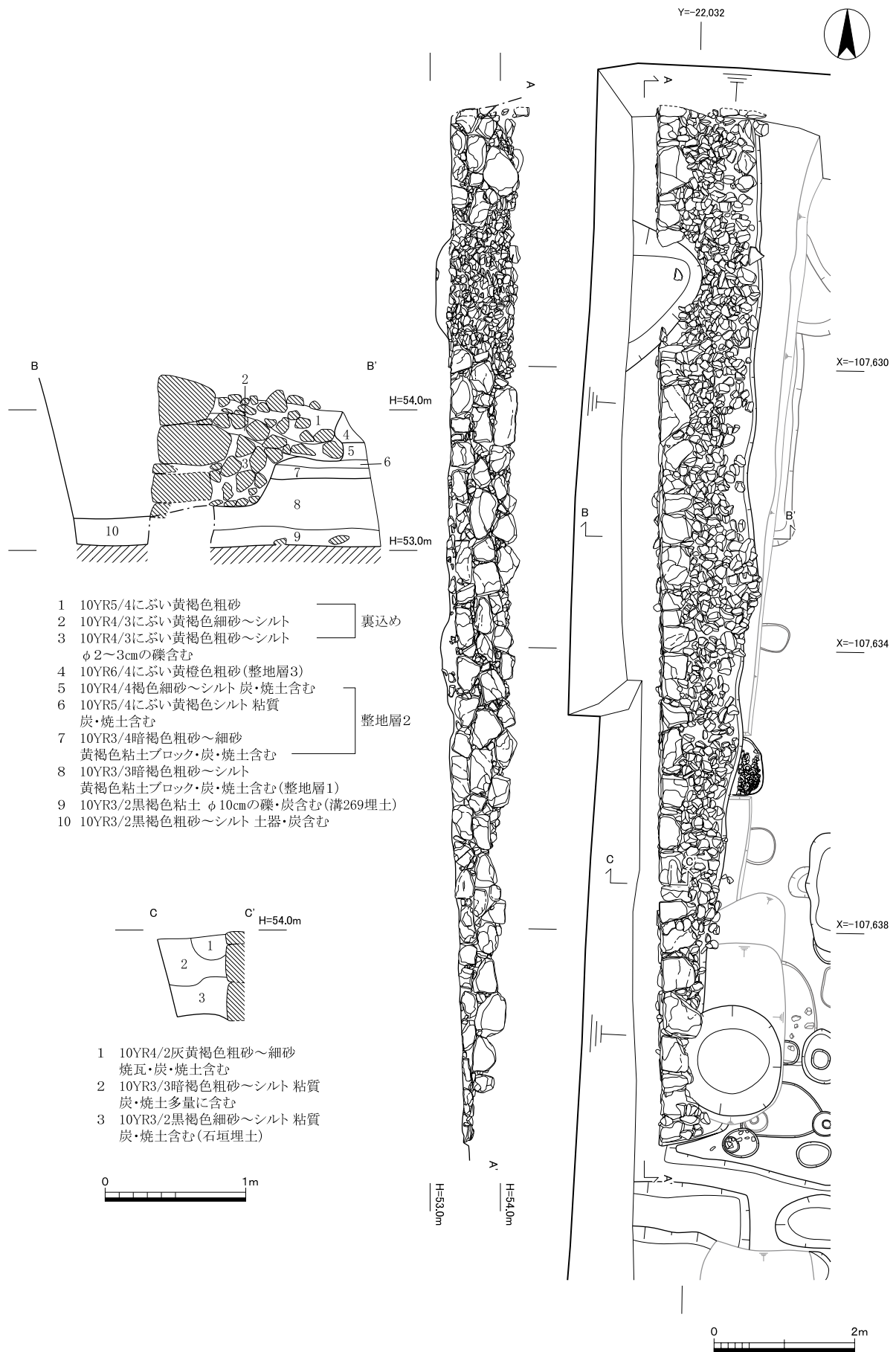




- | | |
|---|---------|
| 1 10YR3/2黒褐色粗砂～シルト 粘質
φ 10～20cmの礫多量含む | 集石71埋土 |
| 2 10YR5/6黄褐色粗砂 φ 3cmの礫・土器片含む | |
| 3 10YR3/4暗褐色シルト φ 3cmの礫・土器片・炭含む | 石室128埋土 |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 φ 1～3cmの礫・
10YR6/4にぶい黄褐色粘土ブロック含む | |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色シルト φ 2cmの礫含む | |
| 6 10YR3/2黒褐色シルト 粘質 炭・焼土含む | |
| 7 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 φ 1～3cmの礫含む | |

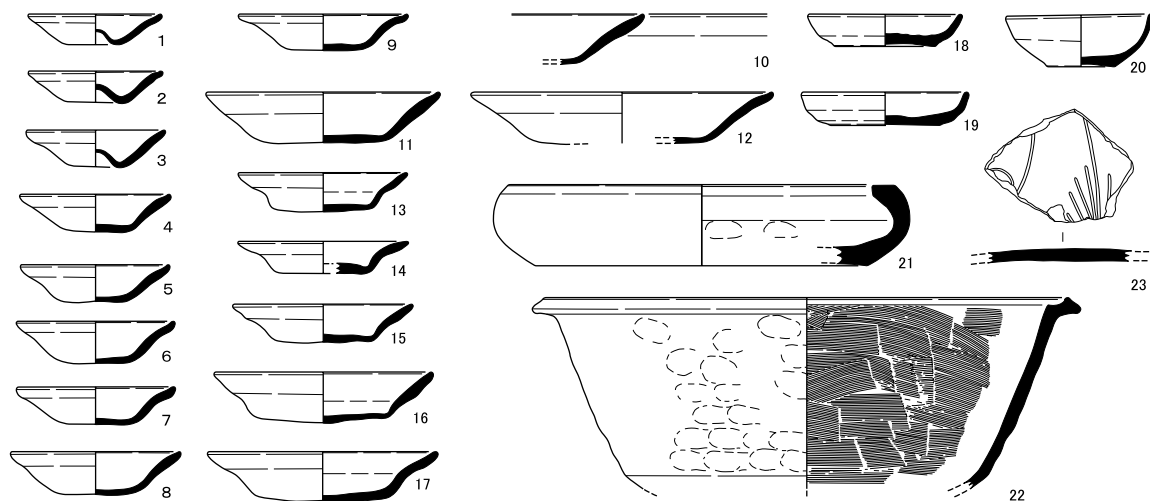
- | | |
|---------------------------------|---------|
| 8 10YR4/4褐色粗砂 | 石室128埋土 |
| 9 10YR3/4暗褐色シルト 粘質 φ 2cmの礫含む | |
| 10 10YR3/2黒褐色シルト 粘質 炭含む | |
| 11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト φ 3cmの礫・瓦含む | |
| 12 10YR3/2黒褐色粗砂 炭層 焼土含む | |
| 13 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質 瓦含む | |
| 14 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂 φ 2～3cmの礫含む | |
| 15 10YR3/2黒褐色粘土(石室128掘形埋土) | |

石室128・集石71実測図 (1 : 50)

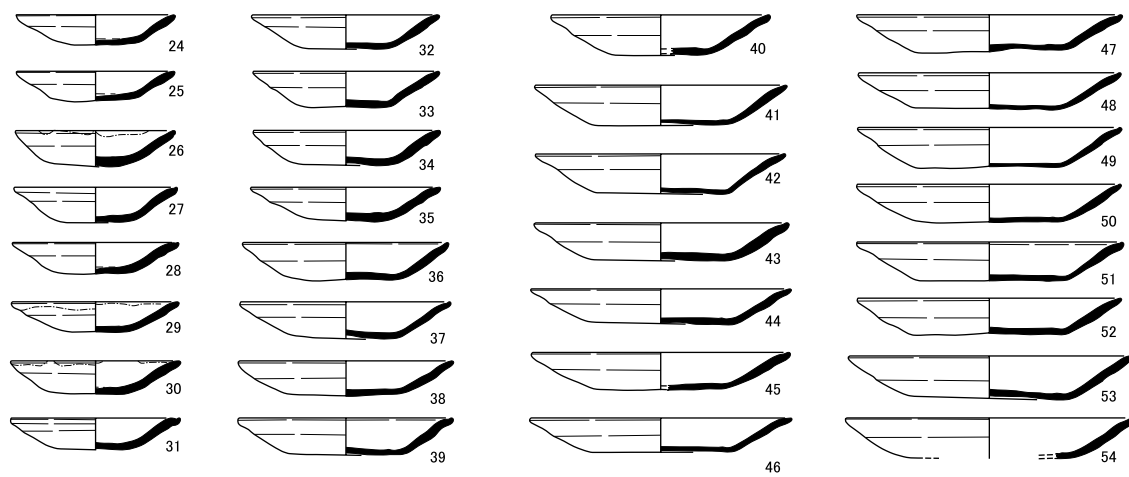


石垣50実測図(平面図・立面図1:80、断面図1:40)

溝271



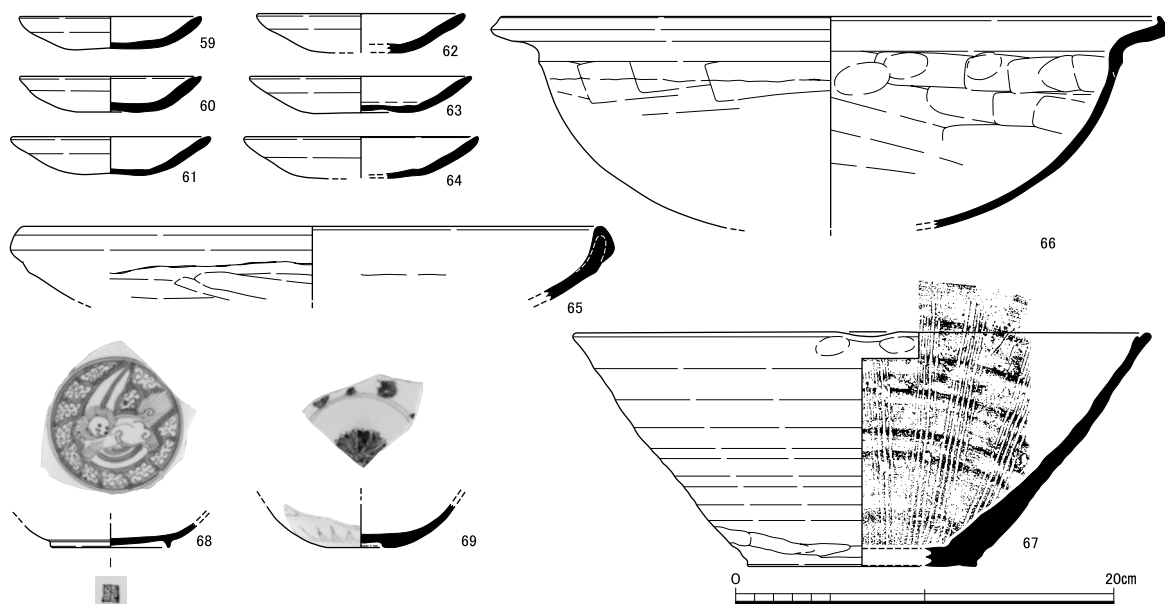
土器溜184



柱穴149

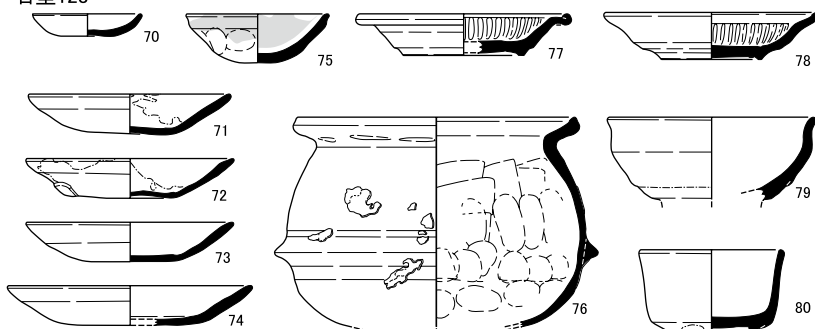


土坑270

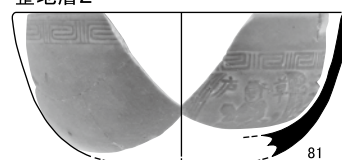


土器実測図1 (1:4)

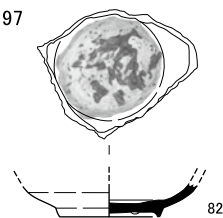
石室128



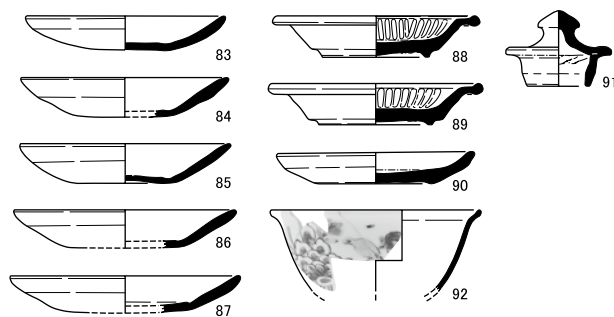
整地層2



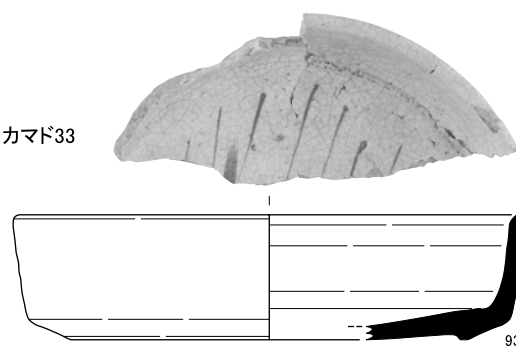
土坑197



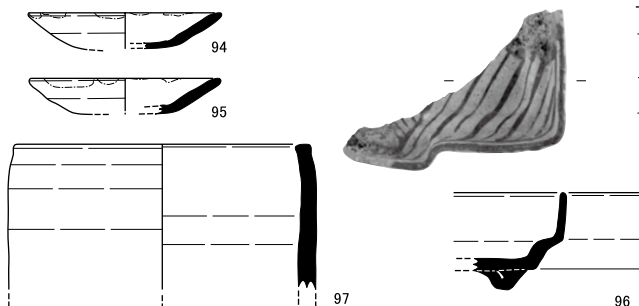
土取土坑186



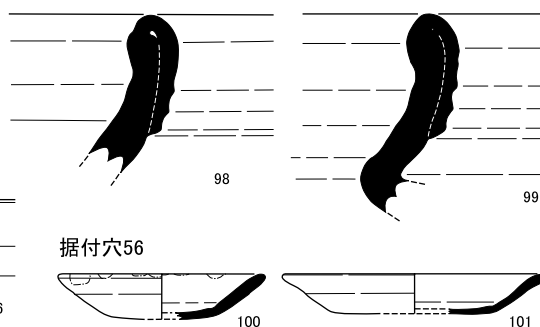
カマド33



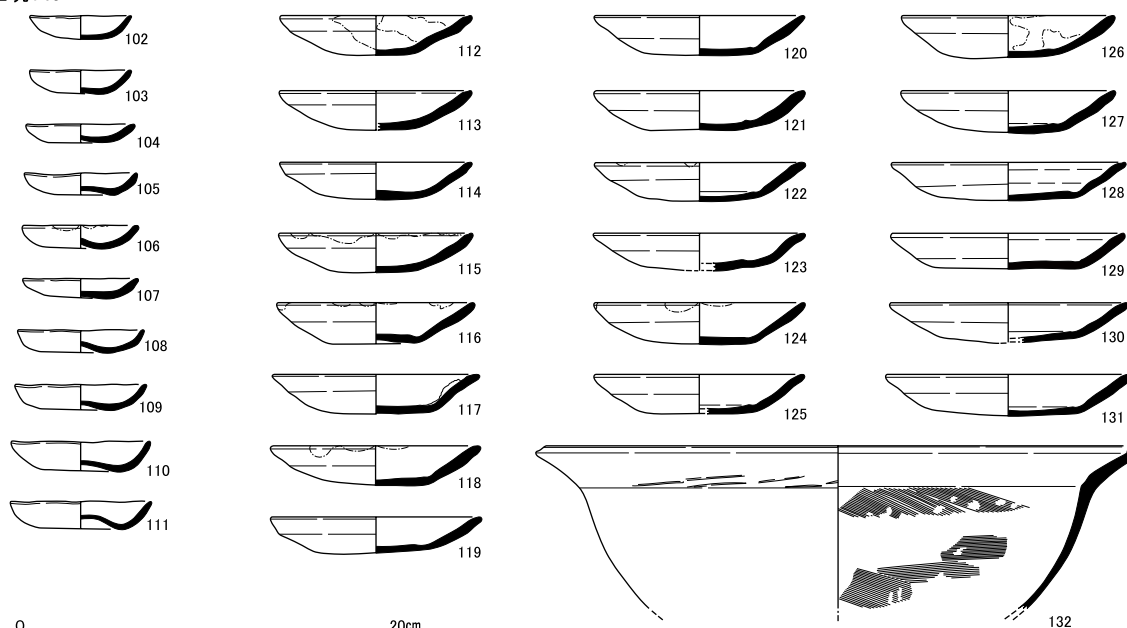
土坑37



掘付穴56

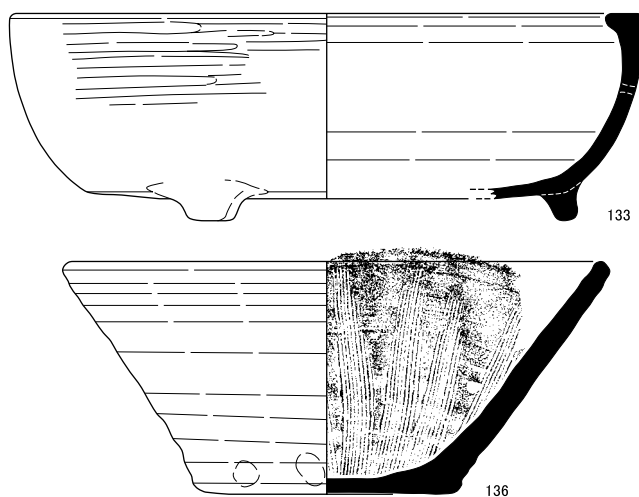
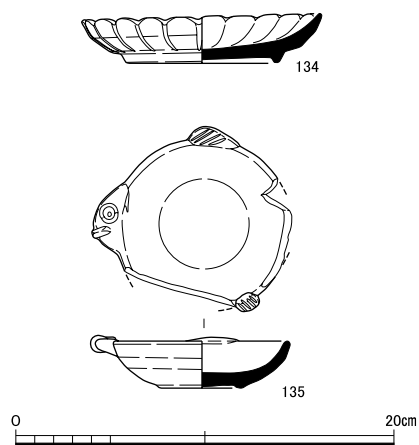


土坑143

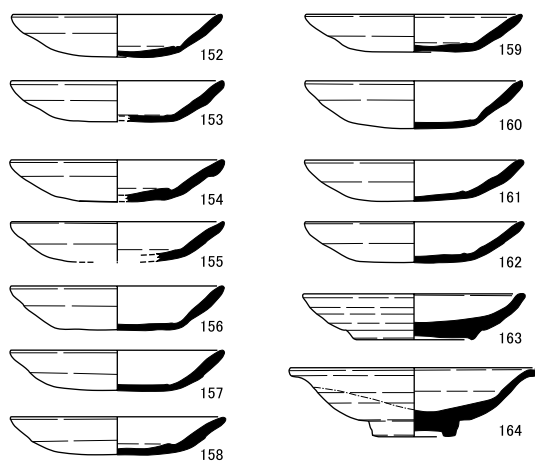
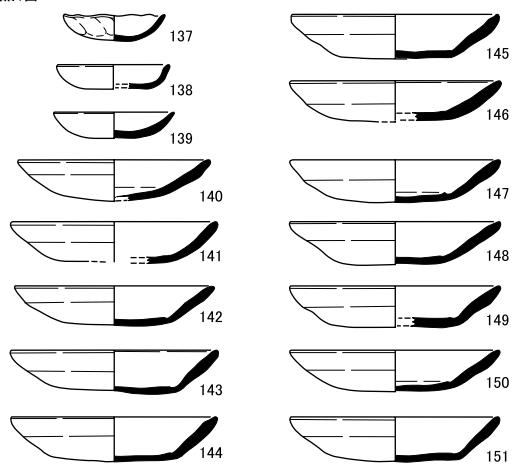


土器実測図 2 (1 : 4)

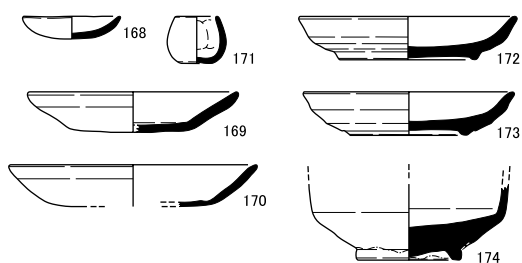
土坑143



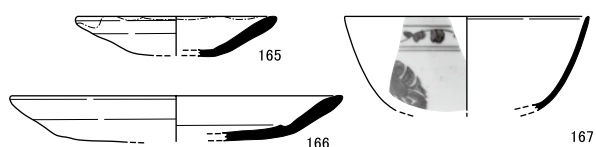
土器溜147



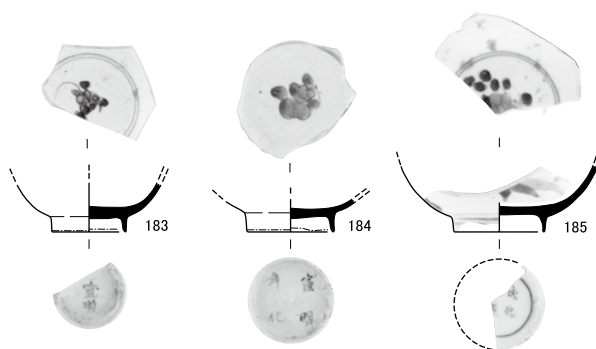
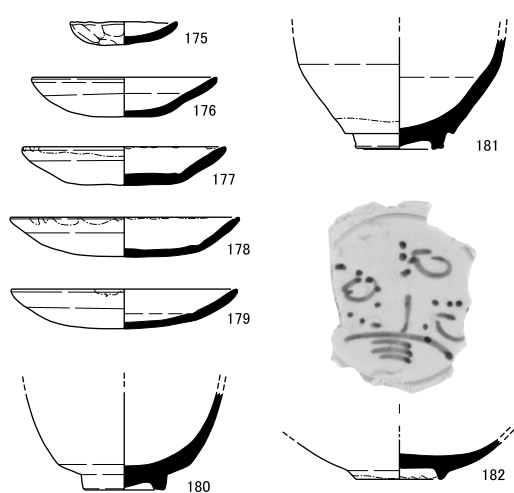
石垣50下層



炭層(東壁27層)

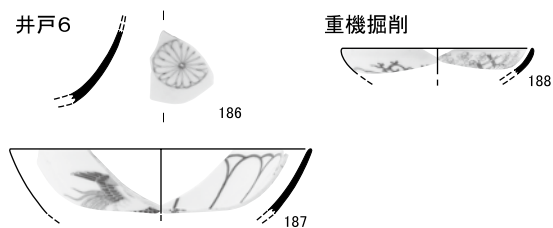


石垣50上層

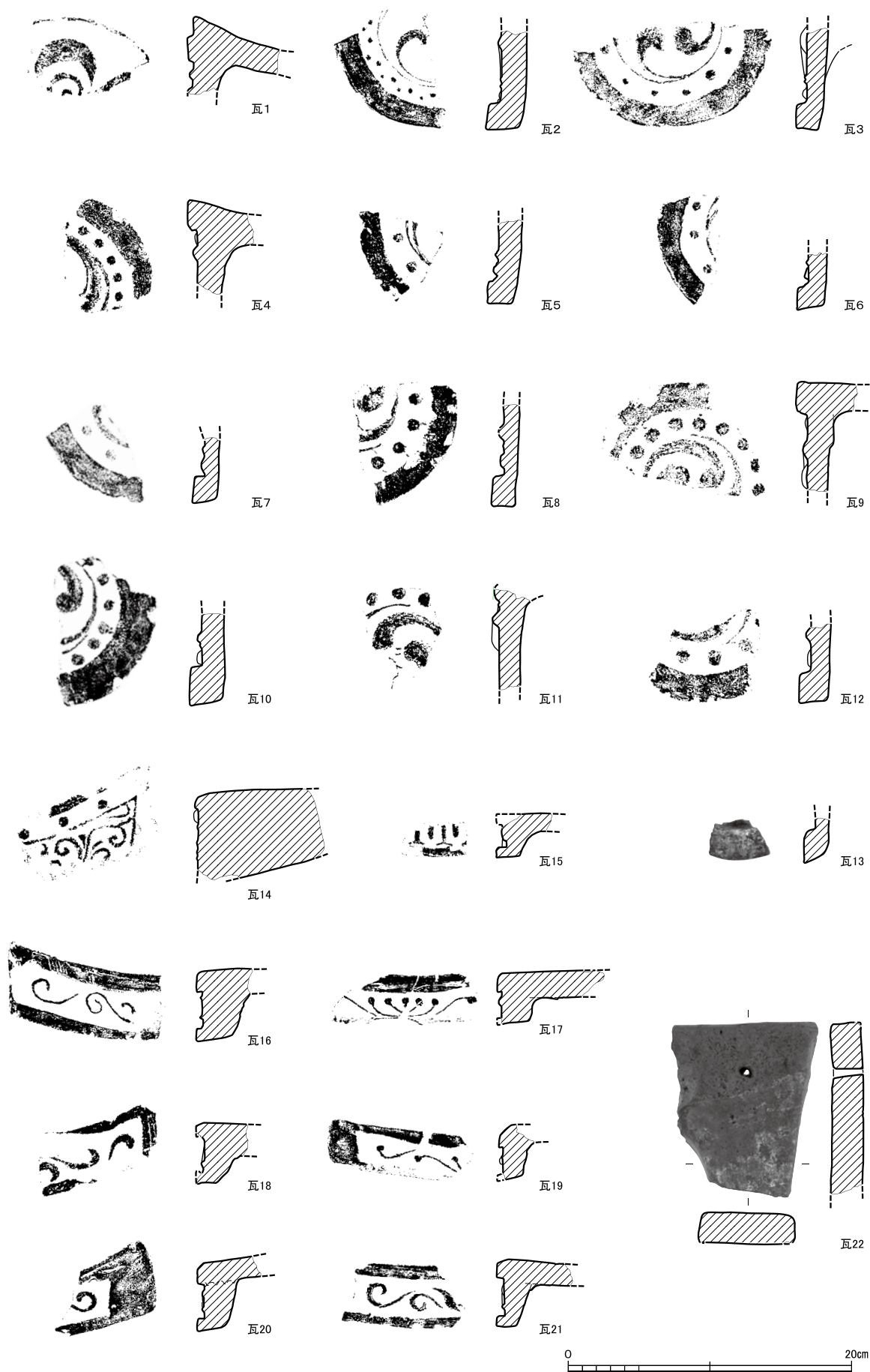


井戸6

重機掘削



土器実測図3 (1:4)



軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦拓影及び実測図（1：4）



1 第3面全景（北から）



2 溝271検出状況（東から）



3 溝271土器出土状況（東から）



1 溝271完掘状況（東から）



2 溝271断面（東から）



3 第2面全景（北から）



1 三和土203検出状況（西から）



2 土器溜184土器出土状況（北東から）



3 柱穴149土器出土状況（北東から）



1 第1面全景（北から）



2 建物1検出状況（北から）



1 建物1粘土貼付状況（南から）



2 布掘地業55検出状況（西から）



3 カマド33土器出土状況（北西から）



4 土器溜147土器出土状況（北東から）



1 石室128検出状況（南東から）



2 集石71検出状況（北西から）



石垣50全景（北西から）



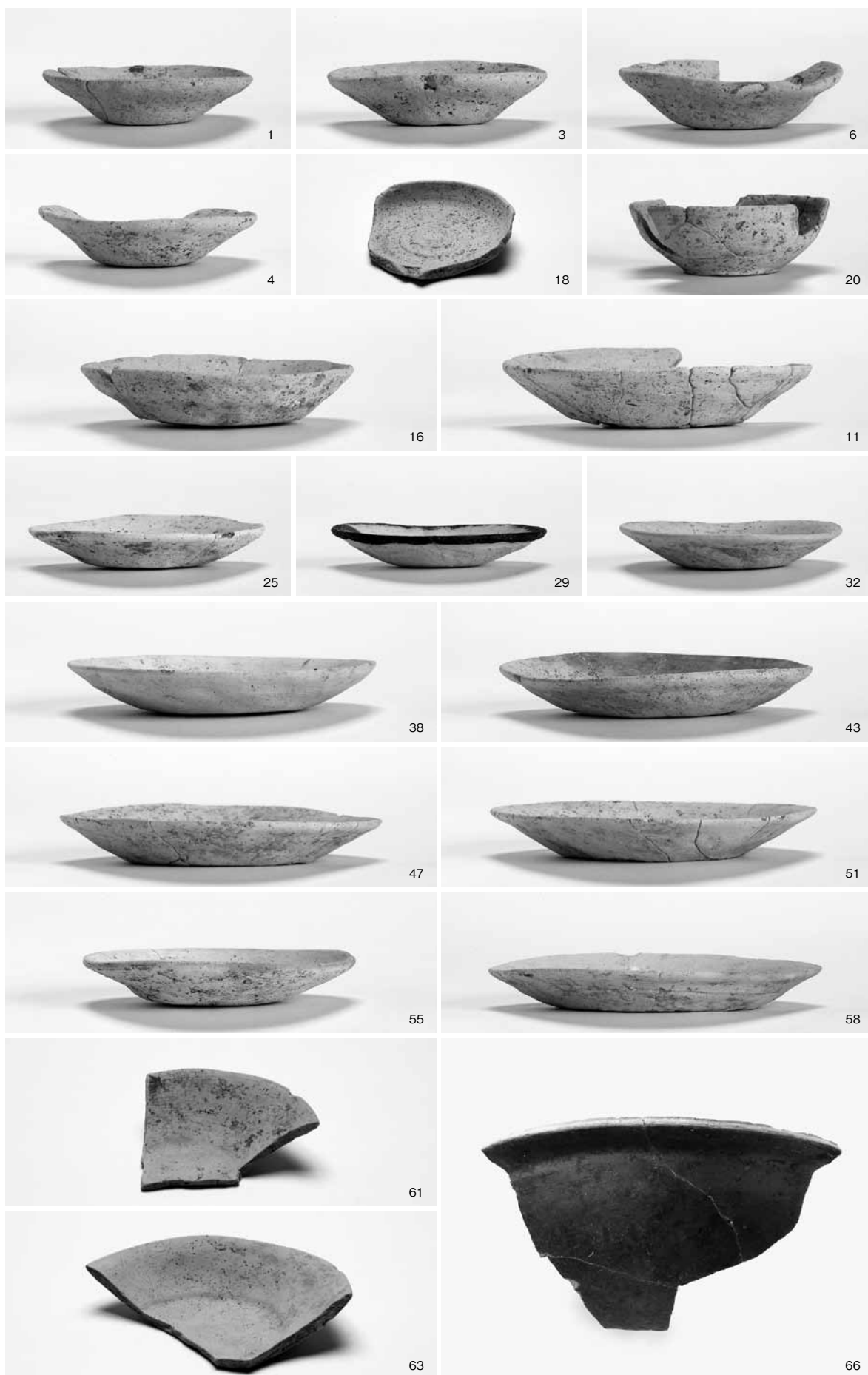
1 石垣50石積み状況（北西から）



2 石垣50矢穴痕跡（南西から）



3 石垣50断割断面（北西から）



沟271、土器溜184、柱穴149、土坑270出土土器



石室128、土取土坑186、カマド33、土坑37・143出土土器



土器溜147出土土器、土製品、瓦、金属製品、鑄造・鍛冶関連遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	むろまちどのあと・かみぎょういせき							
書 名	室町殿跡・上京遺跡							
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2020-11							
編 著 者 名	西田倫子							
編 集 機 関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発 行 年 月 日	西暦2021年10月29日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むろまちどのあと 室町殿跡 かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 おかまつちよう 岡松町255番	26100	230 224	35度 01分 46秒	135度 45分 31秒	2021年1月 12日～2021 年3月15日	204㎡	建物新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
室町殿跡 上京遺跡	邸宅跡	室町時代	溝、柱穴、柱穴列、土器溜、土坑、石室、三和土、土取土坑		土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類		15世紀前半の東西溝を確認した。 江戸時代の宅地の様相を確認した。	
	都城跡	安土桃山時代～江戸時代	礎石建物(据付穴、カマド、土坑、布掘地業、三和土)、柱穴列、土器溜、土坑、集石、石室、土取土坑、石垣		土師器、瓦器、焼締陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、銭貨、金属製品、鋳造・鍛冶関係遺物			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-11

室町殿跡・上京遺跡

発行日 2021年10月29日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961